
異界の狙撃兵

ムスタング

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異界の狙撃兵

【Nコード】

N3983G

【作者名】

ムスタング

【あらすじ】

米第101空挺師団に所属するクルス上等兵。彼はある作戦中、乗っていた輸送機から振り落とされてしまう。パラシュートも開かず、そのまま地面に叩きつけられて死ぬかと思われた。しかし奇跡的にも無傷で目を覚ましたクルスは、敵地のど真ん中で作戦を完遂しようと奮戦するのだが――

第1話 墜落

「機長！左翼のエンジンが被弾！火を噴いています！！」

砲弾がごく至近距離で炸裂した衝撃で皆が将棋倒しに倒れていた時、前の操縦席からそんな叫びが聞こえてきた。

——被弾？

爆発の衝撃でガタガタと機体が揺れる中、一番搭乗口の近くにいた俺は振り落とされないよう必死にしがみついて外の様子を伺った。その光景は壮絶だった。

俺達の乗っているものと同じ機体——C47輸送機の数えきれない程の大群と夜空に咲く白いパラシュートの数々、それを覆い尽くすかのように張られた厚い弾幕。

その下の真っ黒な大地にはチカチカと対空砲の発砲炎も見えた。

史上最大の作戦の名に恥じぬ凄まじい規模の編隊、敵の攻撃。

だがそれよりもっと近くの光景に俺は息を飲んだ。

機体の前方、二基あるエンジンの内、左翼のものから真っ赤な炎が上がっていたのだ。

「た、大変だ！——うわっ！！」

叫ぼうとした瞬間、ドンッ！と腹の底に堪える大きな音がしてエンジンが爆発した。

「お、おい！何の音だ！？」

「つばさが、翼がなくなってる……！！」

誰かの叫び声で皆が騒ぎだす。

しかし生きている方のエンジン音と砲弾の激しい炸裂音のせいで耳元で怒鳴りあっているもほとんど何も聞こえない。現状が把握できない時ほど不安になることはない。

そして皆がパニック陥りかけていた中で次の事態が起こった。

主翼を失いバランスを崩した機体がきりもみ状態で高度を下げ始めたのだ。

「お、墜ちるぞー！！！」

ああ、この声は小隊長だ。

普段物静かなあの人の焦った声に若干驚きながら、俺の体は何もない空中に投げ出されていた。

視界が——いや、体がぐるぐると回る。

出口の近くにいたのが災いした。

さっきまで乗っていた145番のC47輸送機が何度も何度も視界を掠めては凄く速さで通り過ぎ、小さくなってゆく。

背中のパラシュートは開きそうもない。

このままでは地面に叩きつけられて間違いなく死ぬだろう。

しかし意外と恐くはなかった。

それは俺に向かって必死に手を伸ばしてくれていた、親友の姿を最後に見れたからかもしれない。

まあ、どのみち恐怖を感じる時間など大してない。

あの低高度から落ちたのではすぐに——

第2話 会敵

「……う」

目が覚めた時、俺はまずそのことに驚いた。まさか生きているとは思わなかったからだ。

一体どんな奇跡が起きれば飛行機から落ちて助かるのだろうか。

とりあえず痛む頭を抱えながら上半身を起こす。

簡単に見た所出血もしてないし骨も折れていないようだ。

内臓の方はどうなっているか分からないが、もし傷ついていたとしても敵地のど真ん中では大した治療も出来ないので気にしない事にしておいた。

幸い愛銃のM1903A4ライフルはちゃんと持っているしM73スコープも壊れていない、弾薬や食糧の入った雑囊もある。

やはりパラシュートが開いていない事は気になるが、今は戦闘の事だけを考えた方がよさそうだ。

さて、ここはどこだろうか？

フランスのノルマンディーのどこかだということは確かだが……。腕時計で確認したところ、現在時間は03:15。

06:00には友軍の上陸が始まるためあまり余裕はない。しかし現在位置どこるか作戦全体の進捗状況、仲間が生きているかどうかも分からない。

……あいつは無事だろうか？

あの状況で生きていられるとは思えない。

だが俺が奇跡的に生きているように、あいつも生きているかもしれない。

そう思い込まないとやっていけそうになかった。

俺は邪魔になるパラシュートと救命胴衣を近くの茂みに隠し、辺りの様子を伺う。

ここはどこ森だろうか。

背の高い針葉樹が見渡す限りに広がっている。

現在地を知るために標識か線路、それがなければ特徴のある地形を見つけない。

とりあえず動かないことには何も始まらないので東に向かって歩き出した。

よほど降下した場所がおかしくない限り、東に向かえば友軍の上陸地点の海岸に着くはずだ。

その途中に何か見つかる事を祈りたい。

俺は注意深く辺りを警戒しながら夜の森を進み始めた。

静まり返った森の中を歩くこと約一時間、それは不意に起こった。

枝が、折れる、音

自分のものじゃない。

そんなへまはしない。

もつと遠くから聞こえた。

ポケットから急いでブリキの玩具を取り出し、一度鳴らす。

静寂が支配する森の中にカチツという安っぽい音が響いた。

これで相手が味方なら音が二度返ってくるはずだが……、返ってこない。

敵、だ。

腰のホルスターから静かにM1911ガバメントを抜く。

すでにチェンバーには初弾を装填していた。

いつでも、撃てる。

拳銃を構えながら先程音のした方に目を凝らす。

今日は月が出ているが、森の中まではその光は入り込んでこない。

先の見えない闇を睨んでいるとガバメントを握る手が汗で湿っていることに気付いた。

それは手だけではなかった。

喉がカラカラに乾き、心臓がひどく高鳴っている。

心臓の音があまりにうるさすぎて敵に聞こえているのではないかと気が気ではなかった。

——緊張している。

そう思った。

しかしこれでは埒があかない。

俺は一度だけゆっくりと深呼吸をし、足を踏み出した。

いつでも発砲できるようにトリガーに人差し指をかけ、音を出さないように慎重に歩を進める。

そして枝が折れる音がした辺りに来てみたら——そこには誰もいなかった。

こちらに気づかず去って行ったのか、はたまた最初から誰もいなかったのか。

ともかく、敵はいない。

俺は止めていた息を吐き出してガバメントをホルスターに戻した。

カッチ、カッチ

微かに聞こえたその音に背筋が凍った。

一見ブリキの玩具の音に似ていたが——違う!!

次の瞬間ドンッ!という発砲音と共に横に立っていた木の皮が弾け

飛んだ。

俺は撃たれたショックで体が固まってしまった。
体に当たったわけじゃない。

だが、狙われた。

人を殺す道具で狙われた。

その事実が俺から『応射』や『身を隠す』という判断を奪った。
だが再度敵が発砲した時、俺はハツとする。

『何をしているんだ！撃て！！』

自分の中でそんな声が響いた気がした。

一度は戻したガバメントを素早くひつつかみ、マズルフラッシュが見えた所に連射する。

トリガーを引くたびにスライドが激しく後退し、強烈な反動が腕に伝わった。

そしてマガジンに詰まった七発の45ACP弾を撃ち尽くすと同時に、俺は走り出した。

敵を倒せたかは分からない。

だがあれだけ派手に撃てば他の敵にも気づかれたはずだ。

この暗闇の中で大勢を相手にするのは危険すぎる。

そう理屈を並び立てて、俺はその場から逃げ出した。

この時はただただ怖かった。

自分が殺されることが、自分が殺すことが。

しばらくの間走り、止まった。

俺を追いかけてくる足音はない。振り切ったのか、それとも――
俺はかぶりを振ってその考えを振り払った。

『なんて情けない』

そんな思いが心の中を占め、悔しさに拳を握り締める。
猛訓練を経て得た自信が音を立てて崩れ落ちた気がした。
二年以上の苦しい訓練に耐えてきたのに、いざ敵と出会って俺がしたことと言えば適当に銃をぶっぱなして逃げただけだった。
何のための訓練だったのか。

「……………」

俺は自分を恥じ、戒めとして頭を殴った。
鉄帽の上からでは手の方が痛かった。

第3話 処刑

しばらくの間俺は木の影に身を潜めていた。

ガバメントに新しいマガジンを差込み、ライフルの点検を軽くして、その後も立ち上がりせずに座り込んで夜空を見上げていた。

こうしていると故郷にいるような錯覚に陥る。

敵地で見ても祖国で見ても、月は全く同じだった。

何も変わらない。

相変わらず淡い光で地上を照らしている。

その光を見ていると、戦争をしているなんてことは忘れてしまいうになる。

だが今踏みしめているこの土は敵の占領下だ、こんなところであまりダラけてもいけない。

俺は愛銃を握り締め、東へと向かった。

一発の銃声が聞こえたのはそれからすぐのことだった。

ライフル特有の後を引くような音ではなく、短くて渴いた音。

おそらく拳銃の音だろうと目星をつけ、俺はさてどうするかと迷った。

銃を撃ったということはそこに戦闘が起こったということであり、敵味方双方がいるということだ。

しかし先ほどの発砲音以外には何も聞こえてこない。

まさかこんな短時間で戦いが終わったわけでもないだろうから牽制のつもりで撃ったのか、はたまた――

「……どのみち行ってみるしかないか」

長々と推察するよりも直接見に行ったほうが早そうだ。

最悪敵と交戦する事態になるかもしれないが、戦場にいる以上それ

は避けられない。
俺は静かに移動を開始した。

「いた——が、あれは……」

M73スコープを通して俺が見たもの。
それはまさに『処刑』のワンシーンだった。

周りよりも少し木が疎らになった開けた場所、そこにドイツ軍の鉄帽をかぶった四人の兵士に囲まれて二人の人間が手を頭の後ろで組んで跪いている。

その内の一人の兵士は小さな拳銃構えており、捕虜のような二人に何か叫び散らしていた。

そしてその兵士の足元に転がっているモノは——恐らく先ほどの銃声のときに殺された者だろう。

「距離は……約50か」

だがそれを見ても俺の心が揺れることはなかった。

死体が全くの無関係の奴だからか、それとも遠く離れた所から見ていただけだからか、とにかく今から狙撃することを考えれば落ち着いていることに越したことはない。

俺は地面に伏せ、背中の雑嚢を台代わりにして銃を構えた。

スコープは300mにゼロインしていたため、スコープ上部に付いているダイヤルを回して微調整し、急いでスコープを覗く。

その時、レンズの向こう側で小さな閃光が走った。

それと同時に響く小さな銃声。

膝をついていた影がぐらりと傾き、地面に沈んだまま動かなくなつた。

——二人目が、殺された。

俺は大きく息を吸い込み……吐き……吸い込み……吐き……そして——止めた。

引き金を絞ると同時にストックがガンツ！と肩を叩く。

秒速800mで撃ち出された7.62mm弾は狙いから少し逸れ、銃を構えていた兵士の右胸を貫いた。

俺は素早くボルトを引いて空薬莖を排出し、次弾を装填する。

揺れ動くレティクルを隣の兵士の頭に乗せ、再びトリガーを引く。

今度は狙い通り、突然の狙撃に動転したドイツ兵の鉄帽に穴を開け、鮮血を散らした。

ボルトを操作し、引き金を引く。

たったそれだけで新たに死体が一つ増える。

最後の一人になった兵士は何事は叫びながら銃を撃ち始めたが、明らかに俺の位置を掴めていない。

恐怖に駆られて闇雲に撃つだけでは敵は倒せない。

その兵士は命を代価にそれを学んだ。

ドイツ兵に処刑されたのは二人だと俺は思っていた。

だがそれは間違いだった。

処刑が行われていた場所で俺が見たのは敵兵の死体と、十一人の死体。

十一人の中には女性も混じっていたが、彼女らの名前は分からない。死体には識別票がなかった。

それどころか、銃も持ってないし戦闘服も着ていない。

処刑されていたのは民間人だったのだ。

その死体も額を撃ち抜かれて脳髓をぶちまけているものや、銃剣らしきもので刺し殺されたもの、全身青アザだらけで撲殺されたものまであり、中にはただ殺すだけでなくより苦痛を与えながら命を奪うような残虐なものまであった。

あの兵士達はこの人達によほど恨みがあつたのか、そうでなければ人を殺すこと自体を楽しんでいたとしか思えない。

だがこんな事をする人間の考えなんて所詮俺には理解できないし、あまり想像もしたくない。

居たたまれなくなった俺はこの場から去ろうとした。

しかし惨い死体が無数に転がる中——生き残りがいた。

うつ伏せになっていたせいですぐには気付けなかったが、確かに息をしている奴がいた。

それは辺りに転がっているような文字通り冷たい大人ではなく、まだ酒も買えないような少年だった。

「おい、大丈夫か？」

声をかけても返事はない、どうやら気絶しているようだ。

助け起こして全身を確かめてみたが、呼吸も安定しているし傷らしい傷もなかった。

敵に痛め付けられる前に俺が来たのだろう。

少年の小さな口に当てていた手を離して、俺は安堵のため息をついた。

と、その時、遠くからエンジンの音が微かに響いてきた。

航空機——ではない。

それよりももっと小さい。

……車か？

音が次第に大きくなってくる。

航空機でなければそれは間違いなく敵だ。

落下傘部隊に車なんて物が配備されている訳がない。

友軍のジープや戦車も夜明けと共に上陸してくるはずだから、味方だという事はある得ない。

やはり接近しているのは敵だ。

それなら早くここから離れた方が良さだろう。

見捨てるわけにもいけないので、俺は気絶している少年を担ぎ上げた。

少年が思ったよりも軽かったのは幸いだが、それでも重荷になる事に変わりはない。

肩にかけてライフルが落ちないように気をつけながら俺は走り出す。しかしいざ走ってみて分かったのだが、これは相当辛い。

子供とはいえ一人担いでいるから重いのは当然だが、少し乱暴に走っただけで少年がずり落ちそうになる。

その度に立ち止まるわけにもいかず、背囊があるから背負うことも出来ず。

仕方がないので前から抱っこする形で走る事にした。

少年の顎を肩に乗せ、足はぶらぶらしないように腰に絡ませ、あとは腰と背中の手を当てて少しでも揺れなくする。

これもかなり無理があるが、少なくともさっきまでのように担ぐより俺はマシだった。

しかしこれでは弾薬の入った携帯袋が腹に当たって、少年の方が痛いだろう。

その証拠にさっきから小さなうめき声が耳元で聞こえている。

しかしここは我慢してもらおう。

今は速やかに敵から離れる事が先決だ。

俺は初めての实战で、子供を抱っこしたまま戦場を走るといって奇妙な経験をした。

第4話 少年

「……はあ」

俺は夜の森の中で一人ため息をついた。

いや、一人じゃないか。

もう一人いるから厄介な事になってるんだった。

俺は抱っこしている少年がずり落ちないように抱え直す。

彼はまだ気を失ったままだ。

勢いで連れてきてしまったこの子だが、これからどうしよう。

まさかずっと抱っこしているわけにもいかない。

俺が向かっているのは戦場で、この子は民間人でありまだ子供だ。

だからと言って放っておくことも出来そうにない。

さっきのようにまたドイツ軍に捕まるかもしれないからだ。

今度捕まったら次は本当に殺されかねない。

この子を一人にするという選択肢はありえない。

しかしこの体勢では銃を構えることもできないし、もし不意に敵が現れてもこれでは抵抗すらできそうにない。

一番好ましい展開は今すぐこの子の目が覚めて、近くの町まで案内してくれることだ。

そしたら少年は保護され、俺は現在地を知ることができて隊の集合地点に直行できる。

「ああ、そうだ……」

よくよく考えたら、少年が目覚めるのを待つ必要なんて全くなかったのだ。

無理にでも起こせばいい。

なんでそんな簡単な事に考えが至らなかったのか、自分でも不思議

だった。

とりあえず安全な場所をと思って俺が選んだのが、3mくらいの切り立った丘の下だった。

この断崖のような丘を背にしていれば背後から襲われることもないだろう。

それにこの周辺は頭上を覆う木が少なく、月光が射し込んでいるので周囲の警戒もしやすい。

俺は抱っこしていた少年を座らせて斜面に寄りかからせる。

その時になって初めて少年の顔をまじまじと見た。

歳の頃は12、3といったところだろうか。

所々泥が付いてたり擦りむけていたりするが、なかなかに整った顔をしている。

少しクセがついている赤茶色の短い髪に薄い唇、すっと通った鼻筋に細く整えられた眉。

大きくなればきっと女の子達が放っておかないだろう。

「おい、起きろ」

とりあえず少年の頬をぺちぺちと軽く叩いてみた。

しかしその目は閉じられたままで開く様子はない。

仕方がないので一番手っ取り早い手段を使わせてもらう。

俺は金属製の水筒のキャップを外し、少年の頭の上でひっくり返した。

「——っ!？」

その効果は抜群。

今まで全く反応をよこさなかった少年が跳ね起きた。

「よう、気分はどうだ？」

少年は目を瞬かせて何が起こったの分かっていないようだったが、俺が声をかけるとエメラルドのような緑色の目がこちらを向いた。すると途端にその表情が険しいものになる。

「どうした、痛む所でもあるのか？」

もしかしたらあのドイツ兵達から暴行を受けたのかもしれない。てつきり痛みに顔をしかめているのだと思って肩に手を置いたら、少年はその手を荒々しく払いのけて立ち上がった。そのまま俺を睨みながらゆっくり後ずさっていく。

「大丈夫、何もしないよ」

少年を安心させるために出来るだけ優しい声を心がけてみた。しかしあまり効果はなかったようだ。

少年は目だけを動かして周囲を確認すると、まるで今にも噛みつきそうな顔で言った。

「他の——皆はどうした」

それはまだ声変わりしていない、子供特有の高い声だった。しかし今の台詞ではまるで俺が仇であるかのような言い草だ。

「……気の毒だが、君以外みんな死んでいた。俺が——」

「よくも——！」

少年はくたびれたズボンから何かを取り出し、吼えながら俺に向か

って走ってきた。

月明かりを反射して鈍くと光るそれは、刃渡り五センチ程の小さなナイフ。

「っ!？」

正直、少年がナイフを突き刺そうとしていたら間違いなくそれは俺に刺さっていただろう。

それほど少年との距離は近かった。

しかし少年はナイフを振るい『斬ろう』とした。

俺は冷静に見切ってその大振りの腕を受け止め、少年の足を払う。

「いたッ」

見事に尻餅について小さな声をあげる少年。

だがその右手にはまだナイフが握られている、その目はまだ勢いを失っていない。

俺は立ち上がるうとする少年の右手首を踏んで動きを封じ、体重をかけた。

少年が痛みを負けてナイフを落とすのを待ってから踏むのを止め、ナイフを遠くへと蹴り飛ばす。

「このおおお!!」

しかし少年はまだ諦めない。

咆哮しながら殴りかかってきた。

「——か、は」

口から空気が漏れ、膝が折れる。

鳩尾を強打されたから呼吸ができないのだろう。

少年が胸を押さえて蹲る。

掴んだ拳を離してやると、支えを失った腕が主と同じようにだらんと力なく垂れた。

「手荒な事して悪かったな。でもこれは没収だ」

また襲われてはかなわない。

俺は少年が持っていた折りたたみナイフを拾ってポケットにしまい込んだ。

危うく本当に殺される所だったが、少年も急に知り合いを亡くして錯乱しているのだろう。

あんな残酷な殺し方を目の当たりにしたのでは無理もない。

この件はこれだけで済ませてやろうと思う。

だがこちらの安全を確保する為にこれだけはしておかなくてはならない。

俺は一言詫びてから膝をつく少年のポケットに手を入れた。

「……気持ちわるい。触るな人殺し」

顔を俯かせたまま少年が感情の含まれていない、ひどく沈みきった声で呟く。

「俺だって男を触って喜ぶ趣味はない。君が何か武器になる物を隠し持っていないか調べてるだけだ。それに俺が殺したのは」

「うるさい……」

少年が耳元で急に怒鳴ったので、俺は心底驚いた。

「お前らが殺した中に僕と同じ髪の若い男がいたろう！？それは僕の兄さんだ！僕の自慢の兄さんだ！兄さんはすごくかつこよくて！僕なんかよりずっと頭がよくて！でもとっても、優しくて……。それをお前らが殺したんだ！僕から兄さんを奪ったんだ！許さない！絶対に殺してやる！僕がお前らを殺してやる！」

少年は端正な顔を怒りに歪ませ、犬歯を剥き出しにして血を吐くような憎しみを言葉に込める。

それは完全に八つ当たりだった。

俺に責められる謂れは全くない。

しかし、俺はその気迫に圧されていたんだと思う。

かける言葉が何も見つからない。

彼の悲しみを和らげてやることも、慰めてやることもできない。

俺にはそんな経験がないから。

その思いを本当には理解してやれないから。

その俺が何を言おうと、彼の心には届かないだろう。

これが戦争というもののか。

これが戦争に巻き込まれた者の怒りか、悲しみか、絶望か。

俺には、重すぎる。

とても受け止めてやることはできない。

また彼もそれを望まないだろう。

だがそれでも何か、何か俺に出来ることはないのだろうか？

なんでもいい。

気がきいた言葉じゃなくても、行動でもいい、何かないだろうか。

必死に知恵を絞りだし、十数年の間に培った経験を思い出して、何かできる事はないかと懸命に考えた。

だが、結局俺には何も思い付かなかった。
何もしてやれなかった。
俺にできることはせいぜい……。。

第5話 覚悟

少年の心の叫びを聞いて俺が心苦しい気持ちになっていた時、不意に人の気配に気付いた。

微かだが耳に入ってきた、聞き慣れない言葉。

二人、いや三人？

会話しながら近づいてくる。

これは――背後、丘の上だ！

「絶対、絶対！僕がお前らを――ひゃっ！？」

激昂してわめき散らす少年の口を塞いで小さな体を引き寄せる。そのまま丘の斜面に背を預けて息を潜めた。

「むー！むむうー！ー！」

「静かに、すぐそこに敵がいる」

ジタバタと暴れる少年の耳元でそう囁くと、少年の体がビクツと動いて静かになった。

助かる。それでもし少年が自暴自棄にでもなって騒ぎ立てれば二人とも見つかって殺されること必死だ。

「このままやり過ぎす、いいね」

少年がコクコクと頷くのを確認してから口を塞いでいた手をのけてあげる。

しかしトチ狂って変な行動をされては適わないので胸に回した腕はそのままにしておいた。

静かにさせるために少年には敵がいると言ったが、正直上にいるのが敵かどうかは分からない。

小さく聞こえてくる会話の内容が分かればいいのだが、生憎俺にドイツ語やフランス語の教養はない。

近くに住む民間人だという可能性もある。

もしかしたら俺からは聞き取れないだけで、友軍が英語で話しているという可能性も捨てきれない。

だが角度的に姿は見えないし、合言葉を使う事も憚られた。

もし上にいるのが友軍だったとしてもこの合言葉を知っているのは米第101空挺師団だけだからだ。

降下予定地点の近くには第82空挺師団も降下しているはずだし、位置は大分離れているが英軍もグライダーで来ているはずだ。

彼らに俺達の合言葉は通じない。

そしてそれ以上に敵である確率が高い。

現状では身を潜めてやり過ごすのが一番だろう。

「……おい、この手をどけろ」

上を仰ぎながら気配を探っていると、そんな小さな声が下の方から聞こえてきた。

視線をそちらにやると、苛立たしげに少年が俺を見上げている。

冷静になって見てみると、急いでいたためか俺の手はわざわざ少年の脇の下を通って反対側の肩を掴んでいた。

こんな無理な態勢でいるのが不快なのだろう、忌み嫌う相手では尚更だ。

「別にいいけど、動くなよ」

少年が無言で頷いたので回していた手を離してやった。

そのまま大人しくしてるのを確認してから再び視線を上に向け、息

を潜めた。

さっきまで少年にしてやれることはないかと考えても何も思い付かなかったくせに、敵がいると分かると途端に頭が冴えてきた自分に呆れながら。

それにしても敵兵が多い。

俺はこの森の中で既に三回も敵と、または敵らしき人間に遭遇している。

それも夜間に、俺自身がそう大した距離を移動してないにも関わらずだ。

この森には何か拠点のような物があるのだろうか？

事前に撮影された航空写真にはどこの森にもそれらしきものは何も写っていないかつたはずだが。

もちろん、散在する対空火器や擬装された砲があつたとしても精密さに欠ける航空写真に写っていないくても不思議はない。

……不思議はないのだが、それにしても歩哨が多すぎはしないだろうか？

連合軍が大規模な反攻作戦を発動させたのは敵も気づいているはずだから、それを警戒して……？

納得のいく理由にはなるが、どこか釈然としない。

だいたい夜の闇と生い茂る樹々で満足に周囲を確認することもできない森に歩哨を出して効果があるのか？

重要な拠点に留まり、全力でそこを守る方が正解ではないか？

……敵の意図が読めない。

俺が分かる事は、今この場所は敵が活発に動いており単独行動は危険だということ。

それと――

俺はチラッと視線を落として小さな赤茶色の頭を見た。

——いつまでも一緒に行動していたのではこの子を、そして俺自身もより一層の危険に晒すことになるということだ。
なるべく早くこの子を安全な所まで送っていかなくてはならない。

そのまま少年と二人で隠れていると、数分後には人の気配がしなくなつた。

どうやら移動したらしい。

見つからなかったことに安堵していると、すぐ目の前に立っていた少年がスタスタと歩きだした。

そして数歩離れた所でぐるりと回転してこちらを向いたかと思えば、俺に向かって右手を上げた。

そこに握られていたのは月光を反射して鈍い銀色に光る、筒状の塊。俺の拳銃だった。

「何の真似だ？」

その銃口はまっすぐに俺の胸へと向けられている。

引き金に掛けられた人差し指にはまだ力が込められていないが、その気になればコンマ一秒もかからずに引くことができるだろう。それにたしか……あの銃には安全装置をかけていなかったはずだ。

「お前に聞きたい事がある」

「奇遇だな、俺も君に聞きたいことがある」

少年の口調は淡々としたもので、俺が軽口をたたいても特に反応を返さない。

大声で怒鳴り散らすよりはマシだが、なんとも不気味な感じだ。

「お前の仲間はどこに行った」

隊の仲間は今から探そうとしていたんだが、彼が聞きたいのはそういう事ではないだろう。

彼は自分のツレを殺したのが俺の仲間だと勘違いしている。

先の会話でそれははつきりとしていた。

少年から銃を盗まれ、あまつさえそれを向けられるなんて事態になったのは俺が早々に誤解を解いておかなかったことが原因だ。

正直、少年の行動力を見くびっていたのもあるが。

一重に俺の責任、だな。

「仲間がどこに行ったか知ってどうする？」

「決まっている。見つけだして皆の仇を討つ」

まあ当然そうくるだろうな。

「子供の君が、そんなちっぽけな銃一つで？」

「そんなこと関係ない。言うのか、言わないのか」

「俺が言わなかったらどうする？」

「お前を撃つて、他の奴から聞き出す」

「聞き出す？ どうやって？ 仇の名前でも知っているのか？」

「お前には関係ない！ 仲間がどこに行ったのかさっさとええ！」

少年が片手で持っていた拳銃にもう片方の手を添えて突きつける。ガバメントの重さは約一キロ、少年の細腕で長い時間構え続けるの

は少し辛いだろう。

それに加え、絶対的弱者の立場であるはずの俺のナメきつた態度で再び感情的になってきて――

「いいから早く言え、この卑怯者のジャップが！」

ジャップ

そう、か。

ジャップか。

そこまで言われて黙っていられるほど、俺は大人じゃない。

「……見くびるなよ」

「――ッ」

少年がはつと息を呑む。

「俺達は、絶対に仲間を売ったりはしない」

いつも通りしていたつもりだったのだが、もしかしたら表情が険しくなっていたのかもしれない。

少年の握る拳銃がカタカタと小さく震えている。

「先に言っておくが」

俺は努めてゆつくりとした、言い聞かすような口調で話しかけた。

「もしその引き金を引いたら、その時は躊躇なくお前を殺す」

『殺す』という明確な殺意を込められた言葉に少年の体がビクリと震えた。

今までずっと『君』と呼んでいたのに、ここに来て急に『お前』に変えたのも効果があったのだろう。

少年の目に宿っていた決意の色が揺らいだように見えた。

「どうする？それでもまだ俺に銃を向けるか？」

この返答如何で自分の命運が決まるかもしれないのだ、少年の心の中では自分の命と仲間の敵討ちが天秤にかけられて葛藤していることだろう。

もちろん零距离射撃等で俺を確実に殺すという手もあるが、それをしてしまえば仇への手がかりは完全になくなってしまう。

仇を討ちたいのなら俺を殺すことは出来ないし、手足などを撃って脅すことも出来ない。

その場合は俺が少年を殺すことになっているからだ。

事実、それができる自信が俺にはある。

つまり少年がとれる道は二つ。

何らかの方法で自分より体格の優れている俺を痛め付けて尋問、または舌戦で俺を変心させ説得すること。

しかし俺が仲間を売らないと言っている以上説得は通じないし、尋問などしようものなら返り討ちに合うのが目に見えている。よって彼がとる道は残った一つになる。

しばらく待っていると、少年の震えが止まった。
どうやら答えが出たらしい。

俺の胸にまっすぐ向けられていた銃口が動いた。

――上へと。

「……そう来たか」

胸ではなく、少年は俺の頭へと照準を合わせたのだ。
確実に一発で仕留めるために。

そう、忘れてはならないのは、少年にとって俺という人間も所詮は
仇の一人にすぎないという事だ。

仇全員を殺せないのならせめて一人でも。
それが少年の出した答えだろう。
後は

「引けるのか？その引き金を」

後は、人差し指にほんの少し力を加えるだけだ。
だがその僅かばかりの力を振り絞るのが一番難しい事だろう。
今の少年は指の関節を曲げるだけで人を殺せる。
それはなんてことない、簡単すぎて笑えるほどだ。
しかしどんなに簡単に消せてしまえる命の灯火でも、消してしまっ

た代償は必ずどこかで払わなければならない。

今の少年のように復讐に燃える人間が現れるかもしれないし、または罪の意識に自我が耐えきれないかもしれない。

どのみち人を殺めてしまえばもう後戻りはできないのだ。

そしてそれは俺もまた然りだ。

だが、俺には遂げたい志がある。

自分が汚れてでも守るべき対象をはっきりとこの目に映している。

だから奪った命を背負う覚悟がある（それでも、初めての戦闘だっ

た先ほどは混乱してこの上なく情けない姿を晒してしまったが……）

少年に、それほどの覚悟はあるのか。

覚悟があれば、盲目的にまで仲間を想う気持ちがあれば、引き金は
おのずと引かれるだろう。

それは『撃つ』という意味云々ではなく、気持ちの問題だ。

俺が静かに見つめる中、少年は銃を構えたままゆっくりと目を閉じる。

数秒閉ざされた後に俺に向けられたその緑色の瞳は、確かな力が宿
っていた。

——どうやら答えは完全に決まっただけだ。

少年の指が、動いた。

第6話 後悔

カチン

そんな小さな音が森の中に響き、静寂の闇にとけ込んでいった。

「……………え？」

少年がぽかんと口を開けた。

その顔には何が起こったのか分からないといった表情が浮かんでいる。

少年の指は確かに引き金を引いたはずなのだ。

現に今も引いている。

なのに――

――弾は、出なかった。

「……………ふう」

俺はため息をつきながら呆然としている少年に近寄り、その手から

拳銃を取った。

「さて、まずはいろいろと訂正しないとな」

ニツと笑顔を浮かべて少年の顔を覗き込む。

「まず一つ目、銃を撃つ時はスライドを引いてチェンバーに初弾を装填してから引き金を引くこと」

目の前でその動作をして見せる。

『ジャカツ』という音を立てながらスライドを目一杯引き、離すとバネの力で元の位置に戻った。

これでいつでも撃てる。

銃に初弾が装填されていなかったのは俺がすっかりしていたせいであり、少年が気づかなかったのも無理はない。

もとより少年に銃の知識があるとは思えない。

だから教えておく必要がある。

通常、拳銃が弾切れを起こした時はスライドが後端まで後退して止まり、ホルドオープンの状態となる。

その状態で空のマガジンを抜き取り、新しいマガジンを差し込んでスライドストッパーを解除することで給弾と初弾装填を同時に行うのが普通である。

しかしあの時の俺はぼーっとしていたため、新しいマガジンを差し込む前にスライドストッパーを解除してしまったのだ。

よって初弾を装填するにはまた別にスライドを引かなくてはいけなくなっただが、静かな森の中であり余計な音は立てたくなかった俺はそのままにしてホルスターに銃を戻した。

もちろんそんな事をすれば咄嗟に撃つ事が出来なくて危険なのだが、それが今回は吉と出たらしい。

俺は拳銃にセーフティー（安全装置）をかけながら少年の反応を待った。

そのまま少年が何か言ってこないかと少し待ってみたが、何の反応もないので構わず続けた。

「訂正二つ目、俺は日本人じゃない。こう見えてアメリカ人だ。まあ、日系二世だから顔はそっくりかもしれないけどな」

「……」

少年は呆けた顔で俺を見つめるだけでやはり何のリアクションも寄越してくれない。

気の強い少年の事だからきつと俺が騙していた事に怒って食って掛かるかと思っていたのだが、まさかここまでショックを受けるとは思っていなかった。

さすがに罪悪感を感じる。

——いや、本当は騙したわけではなくて思わせ振りの態度をとっただけなんだが。

「そして三つ目、俺は君の仲間の仇じゃない」

「……………へ？」

やっと少年が反応してくれたが、それはずいぶんと間の抜けた声だった。

「君を助ける時に仲間の仇は俺がとっておいた、こっちの銃でな」
そう言って肩に掛けている狙撃銃を指差す。

少年はその銃を見つめたまま再び固まってしまった。

これだけ悪質な詐欺をしたのだ、言いたい事など山のようにあるだろう。

しばらく静かに待っていると、少年は震える唇を僅かに開いた。

「……………」

見開いたその緑色の瞳から一滴の滴が溢れる。

「……………」それならお兄様は、うかばれた…かな？」

それは細く小さく、どこまでも弱々しい声だった。

ついさっきまで俺に怒鳴っていた人間の声とは思えない。

「さあ……………」

少年の体は小刻みに震えている。

下唇を噛み、小さな手を強く握りしめて悲しみに堪えていた。

助けが来るのがほんの少し遅かったら自分も死んでいたというのに、兄の甲い合戦のため再び死地へと飛び込もうと決意するにはどれだけの勇気が必要だったのだろうか？

兵士の訓練など受けた事のない普通の子供が、人を殺すために引き金を引くにはどれだけの葛藤があったのだろうか？

どれだけの恐怖を味わったのだろうか？

それを耐えても尚、引き金を引く事にした少年の想いは？

「俺は君の兄さんじゃないから正確には分からないけど——」

そして俺はその盲目的なまでに熱く、純粋な想いを試した。踏みしめた。

「君が生きている事を喜んでるんじゃないかな」

「そう、かな……？ うん……、そうだといいな」

少年は流れる涙を服の袖でぐしぐしと拭いながら、小さく『ありがとう』と呟いた。

それが励ましの言葉に対しての言葉なのか、それとも仇を討った事に対してなのか分からなかった。

俺に分かることはただ一つ。

俺は、最低だ。

ポロポロと涙を流す少年を見ながら、俺は自分の愚行を激しく悔いた。

なぜこんな浅はかな事をしてしまったのか。

不条理で無慈悲な現実を突き付けられて心に傷を負い、どうしようもない怒りと悲しみに包まれた独りぼっちの少年にこんな酷い仕打ちをしたかったのか？

傷口を抉り、追い込まれた神経を逆撫でさせたかったのか？

『違う、今後のために必要だったから彼を試しただけだ』

心の中で俺の冷静な部分がそう反論、いや言い訳する。確かにそうだった。

たとえ復讐の念に背中を押されてでもいい、少年が人に向かって銃を撃てるかが知りたかった。

それ以上に、彼が肉親を含めた仲間という存在をどのように感じているのかを知りたかった。

そしてそれを知る事ができた。

彼の覚悟と仲間を大事に思う気持ちは本物だ。

それこそ、自身の身を危険に晒してでも意志を貫こうとする強さがあつた。

それを知れて良かったと俺は思っている。

……だが、だが他にも方法はあつたのではないのか？

少年にこんな苦しい思いをさせずともよかった方法が。

ない、とは言い切れない。

何せまともに考える時間がなかった。

少年が撃てもしない銃を向けてきた時に咄嗟に思い付いたのがこの三文芝居をする事だった。

結果的に俺は少年の人となりを知ることができ、そして少年は傷ついた。

『ありがとう』だって？

俺には責められる謂れはあっても、感謝されることは何一つしていない。

少年の兄もあの世から俺を罵っているのではないだろうか。

弟をこれ以上追い詰めるな、と。

「……まえは？」

「え？」

心の中で膨れ上がる後悔の念に構っていたら、少年の小さな声を聞き逃してしまった。

「あなたの、名前は？」

俺を見上げる少年の目の周りは赤く腫れているが、頬は既に濡れていなかった。

気丈な子だ、と改めて思った。

「……クルス、だ。クルスⅡクラモト」

「クルスⅡくら、くらかも、と？」

「ああ、父親が日本人だからな。日本の姓だ」

「ジャップの？」

「ジャップじゃなくて日本人」

「ふ、ごめん」

少し語調が強すぎたか、少年が縮こまってしまった。

「あ、いや……そ、そうだ。君の名前は？」

「僕の？」

少年はちらっと上目遣いで俺を見上げたが、目線が合うとすぐに目を伏せる。

そしてそのまま押し黙ってしまった。
何か迷っているようだ。

そんなに言いにくいのだろうか。

「僕は、その、えっと……」

「言いたくないんだつたら別に無理しなくても——」

「うん。僕は……ウィルス＝アストレー。皆からはよくウィルと呼ばれてる」

「ウィルか、いい名前だ。今更だがよろしくな。騙したりして本当に悪かった」

俺は右手を差し出す。

「僕もその、いろいろとごめんなさい、くらもとさん。ナイフとか銃とか向けちゃって。許してくれますか……？」

ウィルがこちらを伺いながらおずおずと手を出してくる。
俺はその小さな手を強く握りしめた。

「いや、全て俺が悪いんだからウィルが謝ることはないよ。それにできればクラモトじゃなくてクルスと呼んでくれると嬉しい」

「う、うん。クルス」

ウィルは素直に頷いて言い直してくれた。
俺も小さく頷いてから握手していた手を離す。

「それで、ウィルはこれからどうするんだ？」

「……」

ウィルがまた黙ってしまった。

無理もない、彼はまだ子供だ。

これから何をすればいいのか、どこに向かえばいいのか、それを決めるのはウィル自身だが、この状況下ではその判断はとても難しいだろう。

選択を誤れば本当に命を落としかねない。

現に彼は一度殺されかけた経験がある。

暫く悩んでいたが、やがてウィルは言いくそうに口を開いた。

「クルス、その……」

「何か手伝おうか？」

ウィルははっとしたように顔を上げる。

その顔には驚きの色がありありと浮かんでいた。

第7話 信用

「僕はサント・エグリスに行きたいんだ。その……できたらクルスも一緒に来てくれないかな？」

ウィルは赤い目で俺を見上げながらそう言った。

『サント・エグリス』

……聞いたことがない。

が、もしかして『サント・メール・エグリス』のことだろうか？
そうだとしたら好都合だ。

サント・メール・エグリスの町はコタンタン半島の東部、暗号名『ユタ・ビーチ』にほど近い場所にある。

便宜上五つに区分したノルマンディー海岸のそれぞれの海岸には、連合軍の上陸用舟艇を脅かす海岸砲が多数あり、作戦区域の最も西に位置するユタ・ビーチにも勿論それがある。

俺のいた中隊はその砲兵陣地の一つを背後から襲い、破壊せよと命じられていた。

だから俺のいた部隊もこの町の近くに降下する手筈になっている。
確かドイツ軍に占領されているサント・メール・エグリスも他の部隊の奪取目標だったはずだ。

つまりそこに行けば間違いなく味方に会えるということだ。

「ああ、その町までウィルに着いていくよ」

「本当に！？　ありがとうクルス」

ウィルが嬉しそうな声をあげた。

これでウィルの安全確保と現在地の把握、さらに部隊への合流が一拳にできる。

そう考えていた俺には彼の純粋な笑顔が少し辛い。

「……それで、町までどのくらいの距離があるんだ？」

「かなり遠いと思う、たぶん」

「方向は？」

「この森から東に行ったところにあるはずだよ」

町が東にあるということは、俺達の現在地はやはりコタンタン半島で間違いないようだ。

しかしこの半島は東西の幅が40〜50kmほどあるので町にたどり着くのには下手すると一日はかかるかもしれない。

地図があればもっと正確な位置と距離をウィルに教えてもらえるのだが、生憎とそんな物を俺は持っていなかった。

「それじゃあ出発する前に、君にこれを渡しておこうか」

俺は腰のホルスターを外し、ウィルに差し出した。

その中には当然だが拳銃が入っている。

先程彼が盗み取り、その銃口を俺に向けたM1911ガバメントだ。しかしウィルはぼかんとした顔でそれを見つめるだけで、なかなか受け取ってくれなかった。

「あ、もちろん君に戦えと言ってる訳じゃない」

いくらなんでも唐突すぎたか、説明不足だったことに気づく。

「これは護身用だ」

「護身用……？」

「そう。俺は狙撃兵だからスナイピングには自信があるけど、銃撃戦となると君を守りきれるかどうかわからない」

俺の愛銃、M1903A4スプリングフィールドはボルトアクションだ。

飛距離や命中精度は高いが、如何せん連射速度が遅い。

もし敵が軽機関銃でも持っていたら間違いなく撃ち負ける。複数いれば尚更だ。

だから、彼が彼自身を守る武器が必要なのだ。

「もし敵と遭遇したら君は真っ先に逃げてくれ。遮蔽物に隠れてもいい。とにかく戦闘から遠ざかること、これを第一に考えてほしいんだ。それでも万が一、君に危険が迫った時はこれを使ってくれ」

俺はウィルの手を取って押し付けるようにガバメントを持たせた。彼はされるがままにそれを握る。

「……ああ、もしかしたら武器を持ってない方が安全な時もあるだろうけど、そこは敵の数と状況を考えて臨機応変に対応してくれ」

少々投げやりな言い草かもしれないが、たぶんそんな事態になるのは俺は死んだ後くらいだろう。

「でも、……いいの？」

ホルスターに収められているくすんだ銀色の拳銃をじつと見つめていたウィルが、ぽつりと呟く。

「町まで無事に着いてから返してくれたらいいよ」

「そうじゃなくて」

ウィルが顔を上げて俺の目をまっすぐ見上げてくる。

その緑色の瞳は疑問と戸惑いで揺れていた。

「僕は一度この銃でクルスを殺そうとした。それなのに僕にこれを渡していいの？ また僕がクルスを狙うかもって思わないの？」

「本当に俺を殺したいんなら君はそんな事を聞いてこないだろ？俺が背を向けた瞬間に引き金を引いて、それで終わる」

「でもこれはクルスを油断させるための僕の演技かもしれないよ？僕が本当にクルスを撃たないって言いきれなの？僕をそんなに信用していいの？」

真剣な表情のウィルを前に、俺は首筋をガシガシと搔いた。

鉄帽を被っている頭は搔けないのでその代わりだ。

次いで思わずため息をつきたくなったが、そんな事ができる雰囲気でもないので我慢した。

——そんな泣きそうな目をしながら言われてもな
それが素直な感想だ。

目を見ればウィルの気持ちがよく分かる。
分かるからこそ、掛けてやれる言葉はこれしかないと思った。
俺はウィルの潤んだ瞳をまっすぐ見つめた。

「俺は、君を信じてる」

なるべく優しく言っただつたが、彼にはちゃんと伝わっただろうか？

ウィルは俺が言うやいなや、ぱつと勢いよく顔を俯かせてしまったからそれはよく分からない。

彼はそのまましばらく動かなかったが、やがてごしごしと力強く目を拭くと俺に背を向けた。

そして慣れない手付きでホルスターを腰に下げると、此方に顔を向けもしないで口を開いた。

「あなたが僕を信じると言うのなら、僕もあなたを信じます」

だから、とウィルは続けたが、少し迷った後、結局口を閉じてしまったのでそれから先の言葉は聞けなかった。

その後、方角も分かっていないのに一人で先を行こうとするウィルを止め、銃の操作方法を教えたりマガジンを渡したりしていると、腕時計の針は05:38を指していた。

あと一時間と少しで1944年6月6日の夜が、明ける。

第8話 銃剣

ウィルの話を聞いてみると、この『フレビール』と呼ばれる森はかなり広いという事が分かった。

森といっても藪や茂みが少なくて歩きやすいのは幸いだが、見通しが悪い場所を長々と移動するのは狙撃がメインの俺としては喜ばしくない。

木々に邪魔されて遠・中距離の射撃が難しいからだ。

それに仲間と合流するまでは極力戦闘を避けるつもりなので、かなり接近しないと敵の存在に気づけないというのも痛い。

唯一、メリットと言えるのが遮蔽物が多いことか。

勾配や窪地はそれなりにあるので身を隠す場所に困ることはないだろう。

「もう少しで日が登るな」

「うん」

隣を歩くウィルがこくりと頷く。

まだ太陽が出ているわけではないが辺りがだいぶ明るくなってきている。

もう闇に紛れて動くことはできないだろう。

これから先は今まで以上の警戒が必要になってくる。

俺は銃を握る手に力を込めた。

「そつえばさ」

「ん？」

「クルスつていくつ？」

唐突な問いかけに俺は警戒を続けながら横目でウィルを見る。

彼はただ前を見ながら淡々と歩いているだけなので本当に何気なく聞いたただけなのだろう。

それなら、と俺も。

「何歳に見える？」

「ん〜」

ウィルが俺の顔を見ながら唸り声をあげる。

「……22、とか」

「残念」

「25？」

「遠くなったぞ」

「まさか、20？」

「まだ下だ。っていうかまさかとは何だ、失礼な」

何とも意味のない会話を繰り返す俺とウィル。

しかしついさっきまでは『仇の兵士』と『憎しみに燃える少年』という構図だったことを考えれば、穏やかでなかなか良い感じと言えるのではないだろうか。

「それで、結局いくつなの？」

「君が先に教えてくれたら答えてあげるよ」

「最初に聞いたのは僕なのに、もう。……僕は八歳だよ」

「ハさツ——！？」

叫んでしまった後で慌てて口を塞ぐ。

静かな場所だからかなり遠くまで響いたかもしれない。

「び、びっくりしたあ」

ウィルが上体をのけぞらせたまま目をぱちくりさせている。

大声を上げた本人がびっくりしているくらいだから彼の驚きも相当なものだろう。

「す、すまない。大きな声を出すつもりはなかったんだが……」

俺は辺りに気を配りながらウィルの体を上から下まで眺め回した。平均より少し長めの足、折れそうな程に細い胴体、華奢な肩、白くて喧嘩などしたことのないような細腕、女の子と間違えそうな中性的な小顔、所々はねている赤茶色の髪、そして俺の腹より少し上くらいにしかない身長。

確かに、よく見れば八歳と言われても納得できる……のか？
いくら何でもこんなに良くできた八歳児は普通いないだろう。
俺はずっと少し小柄な十三歳くらいだと思っていたくらいだ。
それは彼が大人びているから——ではないはずだ。
体は小さいし、声だってまだ声変わりしていない。

「ほら、僕はちゃんと答えたんだから、次はクルスの番だよ」

ウィルについてあれこれ考えているとその彼が急かしてきた。勿体ぶられる間に関心が高まったのか、興味津々な表情で俺を見上げてくるウィルは年相応に幼く見える。

「あ、ああ。俺は――」

少ししどろもどろになりながら俺が答えようとした、その瞬間。

「ЦИ К Ш Я Ю Ъ！」

背後から突き付けられた鋭い声に、体の中を冷たい何かが走り抜けた。

まさか、敵か？

「К Ц Ш！」

同じ声が背後から再度怒鳴り声を上げる。

俺には何と言っているのか分からないが、さしずめ『武器を捨てろ』といった所か。

……これは、ドイツ語か？ それともフランス語？

少なくとも英語や日本語ではない事は確かだ。

ドイツ語ならほぼ間違いなく敵、フランス語なら味方の可能性がある。

だが十中八九、敵に違いない。

最初の声をかけられるほんの少し前、僅かに金属が擦れるような音が聞こえた。

やはり銃口を向けられていると考えるべきだろう。

「ク、クルス。銃を地面にお、置けって言ってる」

俺と同じように動きを止めているウィルが震えた声でそう囁いた。どうやら相手の言ってる事が分かるらしい。

「……隙を見て逃げるぞ」

俺も小さな声で囁き返す。

敵には背を向けているので俺達が会話していることには気付かれていないはずだ。

「俺が合図したらとにかく走れ」

「う、うん」

俺は持っていたライフルを、ウィルは腰の拳銃をホルスターごとゆっくりと地面に置いた。

そして両手を上げて抵抗の意思がない事を示す。

ウィルはだらんと腕を下ろしていたが、俺の動きを見ると慌ててそれを真似した。

「ЦИЙЮЯ」

「ふ、振り向けて」

ウィルの翻訳に従って手を上げたまま振り返る。

そこにいたのはやはり敵だった。

濃い緑色の迷彩服に後ろに庇がある特徴的な鉄帽。

手には木製ストックの長い小銃を持ち、その銃口はしっかりとこちらに狙いを定めている。

——若い、ドイツ兵だ。

俺はその兵士の銃に、先の丸いボルトがあるのを見つけた。こちらの武器と同じボルトアクションのライフルのようだ。もちろん引き金にはすでに指がかかっており、いつでも撃てる態勢だった。

「ЙЦКШ？」

気持ちを落ち着かせるために浅く深呼吸しながら敵を観察していると、その敵が何か聞いてきた。

内容が理解できない俺は横目でウイルを見る。

「ゆ、U・Sの兵士かって聞いている」

U・S？

アメリカの兵士かってことか？

そんなこと俺の格好を見れば一目瞭然だろう。

「そうだ。と伝えてくれ」

「ЦШ」

ウイルが震える声で、恐らくはドイツ語なのであろう言葉で相手に伝える。

すると敵は何事か言っと、自分は横に避けて俺達に前に進めと顎で示す。

それは今まで俺達が歩いて来た方向だった。どうやら捕虜として連行する気らしい。

「……行こうか、ウイル」

不安げに横目で見上げてくるウィルを促し、俺は手を上げたままゆっくりと歩き出した。

慌ててウィルも追ってくる。

しかし慌てすぎて足が上手く動かなかったのか、ウィルは三步進んだところで自分の足に引っかけた盛んに転んでしまった。

「うう」

「だ、大丈夫か？」

見事に顔から地面にダイブしたウィルに、思わず屈んで手を貸そうとする。

「ЙЯЮЯЦ！」

突然、俺の眉間に荒々しく銃口が突きつけられた。

瞬間的に体が硬直し、心臓が跳ね上がる。

眼前で無機質な威圧感を放つ、いつ鉛弾を吐き出すとも知れない真つ暗な穴。

額に汗が伝うのを感じた。

俺は敵兵の灰色の目を見つめたまま、努めてゆっくりとした動きで下ろしかけていた両手を挙げる。

「く、クルス……」

上半身を起こしたところでこちらの状態に気付いたのか、鼻を押さえたウィルが痛みに顔を顰めるのも忘れ、真つ青な表情で俺を見上げていた。

こんな時に他人の心配をする優しい少年の声に俺は応えることがで

きないし、視線を向けることさえできない。

だが敵は違った。

まっすぐ俺へと向けられていたその灰色の目が、一瞬だけ左隣に倒れているウイルへと移った。

その瞬間、俺はウイルがいるのとは逆方向、つまり敵から見て右側へと倒れこみながら敵の銃へと右手を伸ばす。

顔の近くまで手を上げていたため、銃を掴むまでに一呼吸分の時間もかからない。

そして俺の手が敵のライフルをしっかりと掴んだその瞬間、こちらの行動に気付いた敵が引き金を引いた。

火薬が爆ぜ、目にも止まらぬ速さで鉛弾が撃ち出される。

しかし、狙いの逸れた弾は俺の背後の土を穿つだけ。

極至近距離からの発砲音に聴覚が悲鳴を上げたが、命に別状はない。強烈な耳鳴りと頭痛がする中、俺は声を張り上げた。

「ウイル、逃げろ！」

はっとしてウイルが立ち上がりかけるが、すぐにその動きを止めてこちらを不安げな瞳で見つめてくる。

「行け！！」

再度、怒鳴るように叫ぶと、ウイルは今度こそ背を向けて走り出した。

それを確認する暇もなく、横倒しに倒れこんだ俺は右手に握る敵の銃を力いっぱい引いた。

がつしりと銃を構えていた敵兵はそれにつられて体勢を崩す。

その隙に俺は銃から手を放し、右足に着けていた銃剣を取り出した。そして敵に飛び掛るが、すでに敵は体勢を立て直して膝立ちで銃を構えていた。

次の瞬間、大気を揺らす銃声と共に俺の体は切っ先の鋭いライフル弾に貫かれる——ことはない。

そうはならないことを俺は知っている。

覆いかぶさろうとする俺に対し、敵兵は慌てて引き金を引くが弾は出ない。

当然だ、ボルトアクションのライフルはボルトを操作しないと次弾が装填されないのだから。

そしてこんな白兵戦でそんなことをしている暇などない。

動転していた敵兵がそれに気付くのと、俺の持つ黒い銃剣が敵の脇腹を突き刺すのは同時だった。

「！」

敵が痛みに叫び声を上げるが、そんなことはお構いなしに俺は飛び掛った勢いのまま敵を押し倒した。

そして仰向けに倒れた敵兵の腹の上に跨り、両手を使って銃剣を胸目掛けて振り下ろす。

しかし、あと少しというところで敵の手が俺の右手首を掴み、止めをさすには至らなかった。

俺は全体重を腕にかけて銃剣を下へと押し進めようとする。

敵兵は歯を食いしばってそれ以上剣先が下がってこないように堪える。

命がけの力比べが始まった。

状況は俺に優勢だった。

上を取っているのだただ体重をかけるだけでも十分な力になるのだし、何より相手は手負いだ。

圧倒的有利——のはずだった。

だが、銃剣の剣先は敵に近づくとどこか徐々に押し返されている。信じ、られない。

俺とこいつとは一体どれだけの筋力差があるというのか。

「ぐおおおお……！」

固く噛み締めた歯の隙間から唸り声を漏らしつつ腕に力を込めるが、俺が力負けしているのは明らかだった。

敵兵の引きつった口元、その口角が僅かに上がる。

このままではやられると思った俺は、銃剣から左手を放すと思い切り敵の脇腹を殴った。

「——！！」

敵が声にならない悲鳴を上げる。

そこは、つい先ほどこの銃剣で刺した場所だ。

そして次の瞬間、急に腕の抵抗がなくなった。

俺の右手が敵の胸を打つ。

もちろん、その手に握られている銃剣は敵の体の中へと食い込んだ。敵の深緑色の迷彩服は、銃剣を中心に徐々に黒く染まっていった。

その後しばらくの間俺の目を見つめながらぶるぶると震えていたその若い敵兵は、不意に口元から真っ赤な血を吐き出すと白目を剥いて動かなくなった。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

俺はその目をじっと睨み付けながら遅い呼吸を繰り返す。

本当に死んだのか、分からなかったからだ。

人間が、刺されたとはいえ、本当にこんなに、簡単に死ぬものなのか、見当がつかない。

しかしいくら待ってみても、その白目が再び灰色に戻ることはなかった。

死んだのだ。

俺は手が小さく震えていることを自覚しながら、銃剣を死体から抜こうとする。

しかし、力が入らず上手くいかなかった。

「……？」

何かと思って自分の右手を見てみると、袖から覗く俺の手首には敵兵の手の跡がくつきりと赤く残っていた。

それを頭が理解した瞬間に胃の内容物が逆流しそうになったが、必死に飲み込む。

少し危なかったが、口を押さえたまま頭を大きく反らすことで何とか耐え切った。

自分の行為の結果を目の当たりにして吐くなど、許されるはずがない。

その程度の覚悟なら最初から戦場に立つ資格など、ない。自分にそう言い聞かせ、俺は敵兵の死体の上から退いた。

第9話 笑顔

まだ温かい敵の死体から銃剣を抜き取り、敵の服で軽く血を拭ってから右足に取り付けた革製の鞘に収める。

そして武装解除した際に手放したM1903A4ライフルと、ウィルに貸したM1911ガバメントを回収する。

それらを素早く終えた俺はウィルが走っていった方向へと走り出した。

まだこの辺りに敵兵がいるかもしれないのだ、早く彼と合流しなくては。

「——っ！」

しかし、走り出した直後に目の前から人影が飛び出してきた。ぶつかりそうになる勢いを殺そうと咄嗟にその肩を掴む。だが、そうそう急には止まらない。

殺しきれなかった勢いのまま、その人影と俺は衝突した。

相手が狙ったのか、それとも偶然か、鳩尾にいいのが入った。

一瞬息が止まり、嘔吐感が喉まで駆け上ってくる。

喉が焼けるような気持ち悪さを耐えつつ、痛みに腰が折れて前傾姿勢となる。

すると、すぐ目の前まで迫っていた緑色の瞳と目があった。

「あ、れ？ クルス……？」

ウィルだった。

彼はおでこを押さえて少し顔を顰めている。

たぶん俺の鳩尾を強打したのはウィルの頭なのだろう、彼の身長は俺の腹部とまさに同じ高さだ。

「だ、大丈夫か……？」

「……すごくいたい」

そしてやはり彼も痛かったようだ。
おでこが真っ赤になっている。

「……悪い。まさかこんな近くにいるとは思わなかった」

鈍く響く痛みを堪え、気を取り直してぶつかったことを謝罪しておく。

言い訳するとしたら、これから探しに行こうとしていた人物と正面衝突するとは予想だにしていなかったからだ。

というか、ここは先ほど敵兵に出くわした場所から五歩と離れていない。

これでは逃がした意味がないではないか。

「まだこんな所にいたのか」

「その、助けなきゃって思ってた」

「……俺を？」

「………うん」

「そのために戻ってきたのか？」

ウィルが俯いたまま首を小さく縦に振る。
口に出しはしないが、ため息が漏れそうになった。

ウィルの小さな手の中には、例の折りたたみナイフ。

もしかして、そんなもので大の大人二人の死に物狂いの取っ組み合いに乱入しようとしていたのか。

子供のウィルでは何かをする前に吹っ飛ばされるのがオチだろう。

正直「おいおい」とでも言って肩を竦めたい気分だ。

だが、それでも助けに来てくれた彼の気持ちが嬉しくないわけがない。

だからお礼に、というにはおこがましいが、彼の頭を少し乱暴に撫でておいた。

「わわっ！ な、なに？」

何の前置きもなく頭を撫でだしたからか、ウィルが目を白黒させている。

「ん、いや……」

良いやつだな、と思ったからなのだが、正直に言っのは何となく恥ずかしいので言葉を濁しておいた。

「そ、それより！ クルス大丈夫なの？ さっきのやつは——」

そう言いながら、ウィルは俺の後ろへと視線を向ける。

「あ……」

「ほら、もう行こう」

目を見開いて固まるウィルの背中を押し、歩くように促す。

俺の後ろには、先ほど殺した敵の死体がそのままの姿で転がってい

る。

ウィルの年齢を考えると、アレは刺激が強すぎるだろう。

いや、誰だって死体を見れば動揺の一つもする。

ただ、彼はほんの数時間前に目の前で兄弟や知人が惨殺されるとい
う酷い体験をしている。

おそらく、それは一生かかっても癒えない心の傷となって彼を苛む
ことだろう。

そんな、ただでさえ精神的に不安定になっている所に、さらに人の
死を間近で見るようなことがあればどうなるだろうか。

俺は精神科医ではないので正確なことは分からない。

だが、彼にとって悪影響なのは間違いないだろう。

俺はウィルが硬い表情で俯いているのを横目で見ながら、もう一度、
今度は優しく頭を撫でてやった。

「僕は――」

しばらく二人して無言で歩いていると、ぽつりとウィルが呟いた。

その彼の頬には、少し濡れた跡があった。

目も僅かにだか充血しているし、おそらく泣いたのだろう。

しかし、それは俺の前で、ではない。

先ほどから何か思い詰めたような顔をしていたが、涙はこぼれてい
なかった。

となれば、俺が彼を逃がし、敵兵士と格闘していた間に泣いていた
のかもしれない。

敵意を持つ相手に銃口を向けられたのだ、それをこんな小さな子供
が怖いと感じないわけがない。

だが、それならばなぜ、こんなに悩み苦しんでいるような顔をする
のだろうか？

「僕は……その、……ん」

ウィルは何かを言いかけるが、上手く言葉にできないのか、結局何も言わずに口を閉ざした。

その様子から相当言いにくいことなのだと分かる。

もしかしたら、あの残酷な『処刑』に関するものかもしれない。しばらく待ってみたが、ウィルは何度も口を開いては何も言えないまま口を閉じ、その度に眉を寄せて顔を俯かせた。

それでも、しばらくするとまた何か決意したような表情で顔を上げ、打ち明けようとする。

よほど言いたいことがあるのかもしれない。

だが――

「よし、そろそろ朝飯にしようか！」

暗い雰囲気壊すように、俺はことさら元気よく言ってやった。顔を俯かせていたウィルが驚いたように顔を上げる。

「結構歩いたから君も腹減っただろ、ちょっと待ってるよ」

「え？ あ、あの……」

急な話についてこれないウィルをよそに、俺は背囊を下ろして中を漁る。

たしかこの辺りに……っと、あった。

「こんな物しかないけど、結構うまいぞ」

そう言って銀色の包みに包装された板チョコを渡す。

困惑しているウィルはされるがままにチョコを受け取った。

俺は近くの木の根元に腰を下ろすと、背囊の中から戦闘糧食を取り出す。

戦闘糧食と大層な名前を付けているが、本当は自前で調達した干し肉だ。

喫煙者は嗜好品であるタバコを堂々と持っているのだ、食べ盛りの俺が食糧を多めに持つていても文句はないだろう。

そんな開き直りに似た気持ちで背囊に入れてきていたのだ。

そしてそれは正解だったようだ。

ウィルがおずおずと俺の前に座ったのを確認してから、干し肉にかぶりつく。

飛行機酔いを警戒して昨晚からほとんど何も食べていなかったすきっ腹には、香辛料が効いた肉は最高のご馳走だ。

これでビールでもあれば言うことなしだが、それを望むのは贅沢が過ぎるだろう。

なんてことを考えていたら、もう一切れ食べきっていた。

しかし、俺の腹はこんなものでは満足してくれないらしい。

すかさず二つ目を取り出し、大口でかぶりついた。

燻製にしてあるのでジューシーとはいえないが、肉の旨みはまったく衰えていない。

舌に伝わるピリツとした香辛料の美味さに、思わず鼻歌でも歌いた気分だ。

男所帯で自由もない軍隊生活では、楽しみといえるものが少ない。

食事くらいは楽しくなければ、やってられない。

ふと、目の前に座ったウィルが板チョコの包みも破かずに俺の方をじっと見ていることに気がついた。

その表情が少し驚いたものだったので、俺は内心首をかしげた。そして、すぐにその理由に気づく。

「あつ、もしかして君も干し肉の方がよかったか？」

なんとなく甘い物の方がいいかと思ったのだが、彼も肉の方がよかったに違いない。

さっそく背囊の中から俺が食べているものと同じ肉を取り出す。食糧はまだまだあるから、気前よく振舞っても問題ない。

「……ふふっ」

すると何がおかしかったのか、ウィルが堪え切れなかったように笑い声を漏らした。

手で口を押さえているのに笑い声が聞こえてきたのだから、よつぽど面白いことがあったのだろう。

しかし、俺には彼を楽しませるようなことをした心当たりはない。いったい急にどうしたのだろうか？

「くふっ……ご、ごめ……ふふふっ」

ウィルは謝ろうとするが、笑いに負けて最後まで言えていない。

大笑いせず、何とか堪えようとしているあたりが俺には余計に恥ずかしいのだが……。

まあ、ウィルが元気になったのでよしとしよう。

さすがにこの状況で屈託のない笑みを浮かべるのは無理だが、口角を上げるくらいなら俺にもできる。

俺たちは朝日が射す森の中で、二人して声を潜めて静かに笑いあった。

——ウィルは何度も口を開いては何も言えないまま口を閉じ、その度に眉を寄せて顔を俯かせた。

それでも、しばらくするとまた何か決意したような表情で顔を上げ、打ち明けようとする。

よほど言いたいことがあるのかもしれない。

だが——

——だが、言いにくいことは無理をしてまで言うべきではない。

確かに、他人に話すことで楽になることもある。

しかし、それは今すぐである必要はないのだ。

ゆっくりと時間をかけて心を整理し、それでもまだ打ち明けたいというのなら俺は聞こう。

だが、何とか言葉を出そうとする先ほどの彼は、言えない自分が酷く悔しそうであり、悲しそうであり、そして何よりも苦しそうだった。

ここは戦場だ、苦しみならそこら中に転がっている。

自分が望もうと望むまいと、苦しみは向こうから勝手にやって来る。

ならば、仮初とはいえ平和な時くらいは楽しくあるべきだ。

でない、人間は簡単に潰れてしまうのだから……

他人の血に染まった手で肉を口に運びながら、俺はそんなことを考えていた。

「本当にいらなかったのか？」

「うん。チョコだけで十分だよ」

ズボンについた土を払い落としていたウィルは、そう言う顔をした。

その表情は晴れやかとはいえないが、少なくとも先ほどのように思えない。詰めたものではない。

ちよつとでも笑ったのが良かったのだろう。

結局、彼は俺の差し出した干し肉は受け取らず、板チョコを少しだけ食べながらずっと忍び笑いをしていた。

口に手を当てて笑いを隠そうとしていたあたり、俺が何かおかしいことをしていたことは予想できるのだが、身に覚えがない。

まあ、少し釈然としないものの、元気が出たのならなによりだ。

「じゃあ、そろそろ行くか」

「うん」

俺は愛銃を持ち直し、ウィルを連れて東進を再開した。

第10話 異変

「どうかしたの？」

そうウィルが聞いてきたのは、俺が腕時計を確認しているときだった。

「ん、何が？」

「クルス、さつきからそわそわしてるみたいだけど……」

少し遠慮がちにウィルが見上げてくる。

その言葉で、心情が態度に出るほどまでに自分が焦っていることに初めて気づいた。

ウィルが言うには、どうやら俺は気づかぬ内に何度も腕時計を見ていたらしい。

そして時計を見る度にどんどん表情が硬くなっていき、とうとう話しかけても笑顔を見せなくなったので聞いてみたのだそうだ。

俺としては自分が挙動不審に陥っていたことよりも、ずっと笑顔でウィルと会話していたという事実の方に驚いたが、それは今気にすることではない。

そう、俺は焦っている。

しかし、それは俺たちの置かれているこの状況についてではない。

俺たちとは遠く離れた場所で起こっていることについてだ。

いや、正確には『遠く離れた場所で何も起こっていないこと』に俺は焦っている

現在の時刻は08:14。

目が覚めてから約5時間。

ウィルと出会ってから約4時間。

敵兵士と格闘してから約2時間30分。

朝食をとってから約2時間だ。

その間に俺が聞いた音と言えば、夜の森に響く小さな虫の鳴き声や、夜明けとともに動き出した小鳥の囀り、ウィルのどこか凜としたソプラノのような声に、何を言っているのか理解できない敵兵の外国語、そして数回の銃声だけ。

たったそれだけで、いつまで経っても聞こえてこないのだ、砲撃音が。

連合軍の上陸開始時刻は確かに06:00だったはず。

上陸支援の艦砲射撃はどうしたんだ？

何十、何百という海軍の戦闘艦が一斉に撃つんだぞ、その音が一切しないのはなぜだ？

爆撃機のエンジンがうなりを上げるあの爆音は？

それが投下した爆弾の炸裂音は？

敵地のだ真ん中にいる味方の落下傘兵は誰も戦っていないのか？

敵は一発の拳銃弾すら撃たずに降伏した？

——静かすぎる

どれだけ耳を澄ませても、森に広がる深い静寂が変わることはない。火薬が爆ぜ、鉄の雨が吹き荒れ、土が吹き飛ぶ音が聞こえてこない。ということは、この近辺では大規模な戦闘行動が行われていないということになる。

それはつまり、……作戦が中止され、た？

「ク、クルス……？」

急に立ち止まった俺にウィルが心配そうな声をかけてきたが、返事をする余裕はなかった。

『作戦中止』

その考えが頭をよぎった瞬間、体中の血の気が一気に引いたのが分かった。

作戦中止とはつまり、イギリスから輸送船団で運ばれてくる部隊の敵前上陸作戦が中止されたということであり、俺たち空挺部隊が敵地に取り残されたということだ。

作戦の中止ではなく延期の可能性もあるが、それは中止と変わらない。

あれほどの大部隊が作戦を再開するまでにはどれほどのタイムロスがある？

確かに、昨日も一部の上陸用船艇が出航した後に作戦延期が伝えられ、輸送船団がUターンして帰ってくるということもあつたが、それはまだ作戦が初期段階だったからだ。

今は空挺部隊がすでに投入され、イギリスの港でも引き返してきた上陸用船艇でこつた返しているだろう。

それを整え、上陸部隊に有利な気象条件を待っていては次の作戦決行は何日後になるか分かったものではない。

そして、空挺部隊が奇襲してきたことで敵の警戒の目がここノルマンディーに向けられ、次作戦がより困難になることも考えられる。

そうなれば救援、援軍の類は期待できない。

たとえ援軍が来ることがあつたとしても、合流するはるか前に俺たち空挺部隊は敵に包囲される。

いや、敵地に降下した時点ですでに包囲されているのだ。

そんな絶対的不利な状況でも俺たちが戦場に向かえるのは、高い練度と、持ちこたえていれば友軍と合流できる見込みがあるからだ。

だが、今の俺たちには後者が欠けている。

その上、空挺部隊には重火器があまり配備されていないのに対して、

敵は潤沢な歩兵戦力に加えて戦車を有する機甲師団までいる。
殲滅されるまでに10日もかからないだろう。

「……」

俺が思考に耽っていると、何を思ったのかウィルが手を握ってきた。
子供だから体温が高いのだろうか、彼の手は温かった。
その見上げてくる緑色の目を見つめ、いや、と考え直す。

延期といっても、一日二日ではなく数時間の延期ということも考えられる。

もしそうなら、今まで俺が考えていたことは全て杞憂ということになる。

そうであることを祈りたいが、冷静になってよく考えれば作戦中止、又は延期されたでは説明できないこともある。

それは、すでに敵地にいるはずの空挺部隊が敵と戦っている気配が伝わってこないことだ。

いくら俺たちの現在地が森の中とはいえ、この近辺には第101空挺師団や第82空挺師団に属する2万近くの兵がいるはずなのだ、銃声や砲声は一切聞こえてこないのはやはりおかしい。

……状況が分からないというのは何とも嫌な気分だ。
早く部隊と合流できればいいのだが。

「ありがとう、ウィル」

ある程度冷静になれた俺は、手を握ってくれていたウィルにもう大丈夫だと伝えるために笑顔を浮かべてみせた。

なるべく自然な笑顔を作るように頑張ってみたが、できているか怪しい。

だが、ウィルがほっとしたような顔で手を離したので少しはマシだったのだろう。

俺が止めていた足を動かして歩き出すと、彼も少し遅れてついてきた。

「ウィル、君の言っていた街まであとどれくらい分かるかな？」

「正確な距離は分からないけど、この森を抜けたら今度は広い草原が広がってるはずだから……まだまだ遠いと思うよ」

すでに5時間も森の中を歩いているにも関わらず、背の高い針葉樹の木々は途切れる気配がない。
いつになったら森を抜けられるか分からない上に、その次は草原か街に着くにはまだ時間がかかりそうだ。

「ウィルはその、サント・エグリス……だったか？ その街に住んでいるのか？」

「……ううん。僕が住んでるのは首都だよ」

フランスの首都というと、花の都パリだ。

コタンタン半島からはかなりに離れているが、なぜこんな所にいるのだろう？

家族旅行か何かだろうか？

「なんで——」

言いかけて、口を噤んだ。

彼は目を覚ました時にあの場で兄を殺されたと言っていた。

つまり、彼はここまで兄と一緒に来たということであり、彼がここにいる理由には少なからず家族が関わってくるだろう。

俺のどうでもいい好奇心のせいで、そのことを思い出させるのはあ

まりに酷だ。

「なに？ クルス」

中途半端に止めた言葉に反応して、ウィルが俺を見上げる。

なんとなくその目をまっすぐ見ることができなくて、俺は彼の髪を少し乱暴に撫でた。

「わっ、わっ」

急に頭を撫でられたウィルは混乱しながらも俺にいいようにやられている。

撫でるのをやめると、もとから所々ハネていた茶髪がさらにぐしゃぐしゃになっていた。

慌てて髪を直し始めたウィルはしばらくすると満足したのか、俺の腰あたりに小さくパンチを繰り出してきた。

「いたっ」

「もう、急に撫でないでよ。髪が乱れるのあんまり好きじゃないんだから」

言いつつ頬を膨らませる様子は、まるで拗ねた幼子のようだ。

少なくとも年頃の男の子はそんな仕草はしないだろう。

やっとウィルの子供らしい一面が見れた嬉しさに、俺はもう一度その小さな頭を撫でた。

「あーっ！ またっ！」と吠えるウィルのパンチを受け止め、細腕を軽くひねって羽交い締めにする。

「ふえ！？ ちょ、ちよつとクルス！？」

あたふたと顔を真っ赤にして照れるウィルの姿に、なんとなく心が温かくなる気がした。

もしも弟がいたらこんな感じなんだろうか？

ウィルが弟だったら、なかなか楽しいかもしれない。

しばらく東進を続けると、森の中を東へと走る道路に出た。

道路といっても舗装されているわけではなく、土がむき出しのうえに所々に陥没したような小さな穴も開いていた。

道幅は3mほどで、大型車両でなければ離合もできないだろう。

「この道はサント・エグリスに続いてるはずだよ」

「じゃあこれをたどって行けば街に着くんだな」

偶然見つけた道の真ん中に立ち、二人して東の方を見やる。

両脇に並び立つ木々によって少し日陰となっている道には、人影が全くない。

轍の跡ならくつきりについているので、主に通行するのは車両なのだろう。

しかし、ここから遠く離れた首都に住んでいるというのに、こんな森の中の小さな道まで知っているウィルは何者だろうか？

「なに？　僕の顔になにかついてる？」

じつと横顔を見てみると、それに気づいたウィルが口元をぐしぐしと袖で拭いだした。

朝食としてあげた板チョコを先ほどからちよくちよくかじっていたので、それが口の周りについていると勘違いしたのだろう。ウィルは拭いても袖に何も付かないので、首をかしげた。

「ああ、いや。ウィルはこの辺りのことに詳しいのになってね」

「この辺りのこと？ んー、一般常識程度には知ってるけど……」

ウィルは少し自信なさげにぼしよぼしよと言葉を口にした。

彼の中の一般常識には国道でもない小さな道についても含まれるらしい。

「というか、クルスはなにも知らないでここに来たの？」

「うっ」

それを言われると痛い。

降下予定地点周辺の地理については主な街や鉄道、小さな橋までもその位置を一通り覚えてきたはずだが、俺が頭の中にたたき込んできた地図ではこの森がどこにあるのかさえ分からないのだ。

奪取目標である街や敵基地が半島の東側にあるから今までとりあえず東進してきたのだが、それ以外のことは現在地を含めて何も分からない。

この辺一帯の地理に明るいらしいウィルに頼る他ないのだ。

「本当はちゃんと覚えて来たはずなんだが——」

「でも、分からないんだよね？」

「……ああ」

「言い訳はだめだよクルス、自分の非はちゃんと認めなきゃ」

馬鹿にしたいのだろうか、実に良い笑顔で頷きながら肩をぽんぽんと叩いてくる。

さつきしつこく頭を撫でられた仕返しだろう。

だが、つま先立ちしないと手が届かない彼に怒りを感じるのも詮無きこと、だ。

「ああ、俺が悪かったよ」

言って、強めに頭を撫でてやった。

「あああうううう！」

撫でるといふよりは頭を掴んで前後に振ってやったので、ウィルが奇妙な声をあげながらぐくぐくと揺られる。気がすむまでやって手を離すと、ふらふらしながらウィルが恨めしげな目を向けてきた。

「ううう、気持ちわるい。乱暴だよクルス」

それを聞き流しながら歩いていると、ウィルが唸りながらまた俺の背中を殴りだした。

しかし、肩たたき程度の力なので痛くはない。

ウィルのパンチを適当にいなしながら道沿いに歩いていると、後方から低く唸るような音が微かに聞こえてきた。

これは——車両だ。

こちらに接近している、それも複数。

「ウィル、こっちだ！」

「へ？」

音に気づいていないのか、まだ俺を叩き続けていたウィルの腕を掴んで森の中へと引つ張り込んだ。

少し進んだところで藪の中に伏せ、身を隠した状態で道路に視線を向ける。

すると、隣に伏せさせたウィルが静かに話しかけてきた。

「クルス……」

「車両が何台か通るみたいだ。敵か味方が分からないから、このまま隠れてやり過ごす。いいね？」

小さく頷くのを確認してから、再び視線を道路へと向ける。

10mほど離れた小さな道路では、ちょうど車両が通過しているところだった。

くすんだ深緑色の車体に片側六本のタイヤ。

車体後部は荷台になっていて、そこには車体と同じ色の幌がかけられている。

大きさは中型のトラックほど、最大積載量は1tといったところだろうか。

それが十数台ほど、砂煙を上げながら東へ向けて俺たちの前を走り抜けていった。

しばらく待って後続が来ないことを確認した俺は、ウィルを抱き起こして森の中から道路へと出た。

「クルス、さっきのは味方だったの……？」

じゃれ合っていた先ほどまでの和やかな雰囲気、が鳴りを潜め、ウィ

ルが不安げな目でこちらを見上げる。

「……いや、敵だな」

俺は車両の列が向かった東の方角を見据える。

幌は完全に下げられていなかった。

そこから見えたのは、互いに向かい合う形で座った、例の変わった庇の鉄帽を被った兵士達。

間違いなくドイツ軍だ。

トラック一台につき十人が乗っていたとして、少なくとも百人規模の部隊だ。

おそらく一個中隊。

「街に向かったのかな……？」

その可能性は高いだろう。

この状況下で、近辺に守るべき拠点もなければ、街の防衛部隊の増援と考えることもできる。

もちろん、街を通り過ぎた先にある海岸線の砲台に向けた増援かもしれないが。

「とにかく、街に向かって歩こう。ここにしても状況は何も分からない」

「うん、そうだね……」

また少し元気をなくしてしまったウィルの頭を優しく撫で、俺は歩き出した。

周囲を警戒しつつ視線を手首へと落とすと、長さの違う二つの小さな針は10:38を指していた。

——戦いの音は、依然聞こえてこない。

それからやや緊迫した空気のまま歩くこと二時間、ようやくフレビルの森が終わりを迎えた。

針葉樹の森を抜けたその先には、ウィルの言っていたとおり見渡す限りの草原。

青々とした背の低い草が、起伏に富んだ大地に延々と生えている。俺たちが辿ってきた道もまだ続いているが、その行く先に街らしきものは見えない。

代わりと言ってはなんだが、草原を軽く見渡せば牛らしき影がぼつぼつと見えるので、もしかしたら近くに民家があるのかもしれない。

「ふう、やっと森を抜けたね」

太もみを軽く叩いていたウィルはそう言うと、ぐつと背伸びをした。朝からずっと歩きづめだから疲労も溜まっていることだろう。

一瞬、彼をこのままどこかの民家に預けることを考えたが、止めた。

「足は大丈夫か？　だいぶ疲れただろう」

俺は水筒を取り出して水を一口含み、水筒ごとウィルに渡す。

「うん、まだ大丈夫。……ありがとう」

ウィルは手渡された水筒の口をじっと見つめた後、俺に背を向けて素早く何かをしてから水筒に口をつけた。

何をしたかは見えなかったが、おそらく水筒の口を服で拭いたのだろう。

『間接キス』

彼はそれを嫌ったのだと思う。

それを見て彼のお相手となる俺はというと、ああ、そんなものもあったなと、彼を微笑ましく思えた。

男所帯の軍隊生活のせいでそんな甘酸っぱいものがこの世に存在していることすら忘れていた俺にとつて、少し新鮮でもあった。

まあ、男同士でそんなことをしても甘酸っぱいどころか気持ち悪いだけだが。

俺はウィルから水筒を受け取り、再び腰に下げた。

視界が開けているため草原の遠くまで見渡せるが、敵らしき影も、隠れられるような場所も見あたらない。

森の中ほど警戒する必要もないか、と昨夜からずっと張っていた気を少しだけ緩め、ウィルの歩調に合わせてゆつくりと歩き出す。

あと一、二時間もこの草原を歩けばウィルの言うサント・メグリスなる街も見えてくるだろう。

問題は、その街が未だにドイツ軍に占領されているか否かだった。

第11話 渡河

「な、んだ……これは……」

日が傾き、太陽が地平線の向こうへと徐々に沈みゆく頃、夕日によって赤く染まる小高い丘の上で俺は絶句していた。

そこから見えるのは『河』。

膨大な量の水の通り道が、北東から南西にかけてまっすぐに延びている。

対岸までの距離は目測で約150m、流れは速くなく、むしろ全が進んでいないかのように水面は穏やかだ。

だが、表面が穏やかでも目の届かない底の方では荒れているということとはまもあるものだ。

周囲が暗くなってきたからか、波一つ立っていない水面はのっぺりとした濃紺に染め上げられ、どことなく不気味な雰囲気を出していた。

だが、俺が驚いているのはそんな河の状況についてではない。

ここにこれほど大きな河が存在していることに驚いているのだ。

「こんな所に河が……？ いや、そんなはずは……」

急いで頭の中にたたき込んだ地図を広げる。

そこには降下予定地点周辺の地理が事細かに記憶されている。

しかし、どれだけ地図の上に目を走らせても、こんな大きな河は記されていない。

元々の地図が間違っていたのか、それとも俺の記憶違いか。

疑ってみたが、答えは『NO』だ。

これほどの河ならば、民間で売られている地図にも確実に載っている。

それに、これでも俺は記憶力には自信があるのだ。
見落とすなんてことはありえない。

「……ウィル、この河の名前、分かるか？」

「モルティス川だよ」

モルティス。

……やはり知らない名前だ。

「いったい、何がどうなって……」

思わず目を覆って薄暗い空を仰ぎ見る。

思えば、今日は朝から何かおかしかった。

飛行中の輸送機から落ちたにも関わらず無事生きていたことから始まり、未だ誰一人として味方に出会わないこの不可解な状況、地図に載っていない森や河、砲声一つ聞こえてこない、発動しているのかさえ怪しく思えてきた作戦、そして極めつけは――

「クルス、大丈夫？」

こいつの存在だ。

殺されそうになっていたところを助け、そのまま行動を共にしている少年。

なぜこいつが俺の隣に立っているのだろう。

本来ならトンプソンM1A1短機関銃を担いだあいつがいるはずなのに。

……。

「ウィル」

「なに？ わぷっ」

見上げてきた小さな頭を思いっきり手荒に撫でまわす。
何とも撫でやすい位置にある頭だ。

すると顔を赤くしたウィルが思った通りにパンチを繰り出してきた。
腰の入っていないへなちょこなパンチだが、それをいなすことなく
腹に受ける。

ぽすっという何ともしよばい音を立てて小さな拳が服にめり込んだ。

「……ありがとう」

ウィルには聞こえない程度に呟いて、河へと視線を向けた。

どうやら、俺も初めての戦場にだいぶ精神が参ってきているようだ。
あんな身勝手なことを考えるようになるとは。

俺の変な行動に首を傾げているウィルの頭を優しく撫でると、今度は
殴ってこなかった。

さて、不可解な事象について考えるのは一先ず置いて、——先ほど
から考えるのを後回しにばかりしている気もするが——最優先すべ
きは友軍との合流、ウィルの安全確保だ。
今はそのために頭を働かせよう。

俺たちは今、森の中から辿ってきた道とはだいぶ離れた場所にいる。
ここから道の続く先を見ると、そこには河に架けられた橋があった。
今いる場所より1？ほど上流にいった所だ。

橋は鉄筋とコンクリートを組み合わせてあるので車両の通行は可能
だろうが、戦車ほどの重量となると耐えられるか怪しい。

幅から見て二車線はあるだろう。

無駄な装飾もなく、機能性だけを求めた簡素な橋、それが目視によ
って得られる橋の情報だ。

俺は膝立ちの姿勢でM1903A4ライフルを構え、上部に取り付けられたM73スコープを覗いた。

倍率は2・2倍と低いが、スコープの中で1?の距離が圧縮されて俺の目に映る。

手前の方からなぞるように橋を見ると、思った通り少数の敵兵の姿が見受けられた。

橋の入り口と出口の横にそれぞれ土嚢を積み上げ、はっきりとは見えないが……機関銃らしきものが設置されている。

それと、木と鉄条網を組み合わせた簡易バリケード。

一応、検問の体はなしているようだが、兵士の数は多くない。

こちら側と対岸にいる兵士の数を合わせても10名ほどで、一個分隊いるかどうかだろう。

しかも互いの距離はかなり離れているため、もし河の向こうの味方陣地が敵襲を受けたとしてもすぐには援護に向かえない。

各個撃破で簡単に殲滅できそうだ。

「ウィル、もうちょっと暗くなったら河を渡るう」

俺は構えを解くと、革製のスリングを肩にかけてライフルを背中に担ぎ上げる。

そして、万が一にも橋にいる兵士に見つかることのないように、丘の稜線の手前で座り込んだ。

確かに、橋にいる敵兵力は簡単に無力化できてしまいそうなほど脆弱だが、こちらの戦力は俺一人だけだ。

いくら狙撃に自信があるとはいえ、非戦闘員がいるこの状況で戦闘を行うのはあまりに不利。

ならば、敵に見つからないようにこっそりと渡河してしまうのが良策だろう。

「ほら、ウィルもこっちに来て座れ。少し休んだ方がいい」

「う、うん……」

なかなかこちらに来ようとしないウィルに声を掛けると、彼はいやにゆっくりとした歩調で歩み寄り、俺の横に座る。

その歩き方はどこか足を引きずるような動きで、明らかに不自然だった。

「足、どうかしたのか？」

「少し痛くて……」

「ちょっと見せてもらっぞ」

顔を顰めるウィルの両足の靴と靴下を脱がせ、ズボンを膝まで捲る。筋肉のついていない、細い足。

俺は声を掛けてから慎重にその右足の足首に触った。

「どうだ、痛むか？」

「ん、大丈夫」

触れても痛みはなく、腫れた様子もないとなると、捻挫ではないようだ。

そのまま強く刺激しないよう、触れるか触れないかの微妙な加減で脛を撫でる。

「いつつ」

すると、脹ら脛に俺の手が触れたところでウィルが小さく声を漏らした。

ちらりと横目でウィルの顔を確認すると、痛みはそこまで酷くないのか彼は少し眉を寄せているだけだった。
いや、それよりも

「どうかしたか？」

「い、いや、だつてさ……」

ウィルは、まるで恥ずかしがっているかのように口元を手で隠していた。

「な、なんかこう、くすぐったいっていうか、背筋がぞくぞくするっていうか……」

くすぐったいのと背筋がむず痒いのは何か違うのだろうか？
内心首を傾げつつ左足の方も触診してみると、右足と同じく脹ら脛が少し痛むようだった。

「おそらく、筋肉痛だろうな」

朝からずっと歩きっぱなしだったから筋肉に負荷がかかったのだろう。

そこまで酷いものではないようだが、動かせば苦痛を感じることに変わりはない。

俺は空を見上げた。

太陽はまだ完全に沈みきつておらず、今、渡河を開始すれば橋のいる敵兵に見つかりかねない。

もう少し日が落ちるのを待つ必要があるだろう。

つまり、時間的余裕はある。

「ほら、マッサージしてやるから、もっと足を伸ばして」

「ふえ！？ く、クルス！？」

身を擦って逃れようとするウィルを捕まえ、暗くなるまでマッサージを続けた。

「よし、そろそろ行くぞ」

まだ西の空が少し明るいが、これから急速に暗闇が広がる、太陽が沈みきった直後の時間帯。

俺はウィルを促して河の岸边へと移動した。

「ねえ、本当に河の中を通るの？」

「他に渡る方法がないからな。まさか、橋の上の敵を全滅させる、なんて無用な危険を冒すわけにもいかないだろ？」

「それはそうだけどさ、……その、僕……泳げないんだ……」

ウィルはもじもじしながら恥ずかしそうにそう打ち明ける。

俺は眉間に皺が寄るのが自分でも分かった。

そういう大事なことは先に言え、という言葉を食べ込み込むのには少しの間が必要だった。

「……………それなら、俺に掴まっていればいい。それと、銃が水に

浸かるとマズイから俺に渡してくれ」

「う、うん」

賢しいウィルのことだ、俺の機嫌が悪くなったことを敏感に感じ取ったのだろう。

せかせかと忙しない仕草で腰のホルスターを外し、俺に差し出した。

その間に俺はライフルと雑嚢を背中から降ろし、ウィルから受け取った拳銃と一緒に頭上に掲げ上げた。掲げ上げたというが、その重量は相当なもので、正確には雑嚢等を頭の上に乗せて左手で支えている状態だ。

それから、微妙に及び腰になっているウィルの腕を引っ掴み、河の中へと足を踏み入れた。

すぐにブーツの中に水が流れ込み、その冷たさに痛みにも似た感覚が背筋に走る。

「ちょ、ちょっと待ってクルス！ まだ心の準備が——」

ごちゃごちゃとうるさいウィルを視線で黙らせ、黙々と歩を進める。思った通り水面近くの流れはとても緩やかだが、水底の方では流れが速い。

あまり大きく足を踏み出すと足元から掬われそうだ。

水深は岸边から20mほど離れた時点で俺の腰辺り。

つまり、背の低いウィルはすでに肩まで水に浸かっているということだ。

「く、くくくく、くる、くるす……」

水の冷たさのせいか、水への恐怖のせいか——おそらくは両方だろ

うが——ウィルががたと震えながら俺の名前を呼んだ。
その様子から、彼はもう限界だということを悟る。

「ほら、もっとちゃんとしがみつけ」

そう言うと、俺の右腕に掴まっていたウィルは返事すらせずに、体のほとんどが水に浸かっていたとは思えない素早さで俺の背中へとよじ登った。

そして俺の首に手を回し、足を使って腹の辺りをかなり強い力で締め付けて完全な『だっこ』の態勢をとると、ほっとしたように俺の肩に顎を乗せた。

「はふう〜」

「……」

いや、確かに俺は彼にしがみつけと言ったが、ここまでしていいと言った覚えはない。

俺としては水底から足を離しても流されないように、もっと強く手を掴めというニュアンスで言ったのだ。

まさか完全に水から上がるとは思っていなかった。

これでは上半身ばかりが重くなり、非常にバランスが悪い。

下手すると本当に足を掬われて転んでしまいそうだ。

「ああこわかったあ〜」

しかし、俺の背中中で安心しきっているウィルに今更降りるとは言えない。

泳げない彼にとって、河に入るといことはかなり恐ろしいものだったのだろう。

声が完全に脱力している。

どうやら、俺はこのまま進むしかないようだ。

口から漏れそうになるため息を抑え、ウィルがずり落ちないように下から持ち上げるようにして右手を添えた。

その瞬間、ウィルがはっと息を飲んだ音がしたが、首に回した腕の力を強めるだけで他にリアクションはなかった。

河の中ほどを過ぎても水面は俺の胸辺りまでしか上がってこず、俺はウィルと重い装備を抱えたまま着衣水泳をしないで済んだ。

太陽が沈んで月も出ていないこの時間帯では辺りは十分に暗く、遠い橋の上にいる敵兵に見つかる恐れもない。

背中にいるウィルが腰まで上がってきた水を恐れてがたがた震えているのは気になるが、別に今すぐどうなるわけでもないし、向こう岸へはあと60mほどだ。

渡河は順調に進んでいる。不意に、銃撃音が水面の上を走って俺の耳に届いた。

重い反動を伴った射撃を想像させる、連続した重低音。

途切れることを知らないかのようにいつまでも続くその銃撃は、味方からの援護であればとても頼りになるが、敵であれば厄介この上ない。

——重機関銃の射撃音だ。

しかし、その音はひどく小さい。

音のした方を見ると予想と変わらず、銃撃をしている場所は俺達から見て上流にある橋の上だった。

重機関銃は河の兩岸に配置されていたが、撃っているのは俺達が先ほどまでいた岸の方で弾丸が飛んでいる方向も同じだ。

なぜそれが分かるかというと、敵が『曳光弾』（えいこうだん）を使っているためだ。曳光弾とは、対空射撃などにも使われる発射後に発光する弾のことで、これを用いることで弾丸は光の線となって

人の目に写る。

そのため、射手が弾道を把握することができ、射撃中でも照準を修正しやすくなる。

曳光弾は主に通常の機銃弾5発に対して1発の割合で使用されるが、欠点は射撃地点が敵に見つかりやすくなることだ。
今のように周囲が暗いとさらに分かりやすい。

「く、くくく、くるす、あれは、ななな、なにを、うつつてるのかな？」

がたがた震えているウィルの声はひどく聞き取りにくい。

「……分らない。が、俺達には関係ないみたいだ。早く河を渡り切ってしまおう」

俺は止めていた足を再び動かし始める。

銃声が敵の重機関銃の物のみで、他の音が聞こえないことから味方がやられているとは考えにくい。

敵が何かしらの勘違いをして、牽制射撃という形で何もない所に弾を撃ち込んでいるのかもしれない。

とにかく、敵の注意が射撃に向いているのなら好都合だ。

ただでさえ遠く離れたこんなところで河を渡っている人間がいるとは思えないだろう。

結局、対岸についた頃には河に入ってから一時間近くが経っていた。河の流れに絶対に流されないよう、また足を滑らせないように慎重に歩を進めた結果だ。おかげで岸に着いたときには、水が思っていた以上に冷たかったことも関係して体力をかなり消耗していた。

ほとんど俺の背中にへばりついているだけだったウィルでさえ、俺と同じように地面に座り込んでぐったりとしている。

腕時計で確認すると、時刻はもう午後七時を過ぎていた。

体力的にも、さすがにこれ以上の移動は不可能だ。

今日はどこか安全な場所を見つけて休もう。

そう決めて立ち上がろうとしたが、それにはかなりの気合が必要だった。

気持ち切り替えるために河の水で顔を洗ってみる。

もともと体中がびしょ濡れで冷え切っていたためあまり効果があったとは言いにいが、しないよりはマシだった。勢いをつけて一気に立ち上がる。

水を吸って重くなった衣服が肌に吸い付き、寒い上にとっても不快だったが、努めて気にしないようにした。

「ウィル、休める場所を探そう。あと少しだから頑張ってくれ」

背囊を背負いながら掛けた俺の声に顔を上げたウィルは、顔が青白く生気がなかった。

立ち上がることはおろか返事すら返すことができないようだ。

その虚ろな目を見て、もう彼の体力は限界を超えているのだと悟った。

しかし、こんな見通しの良い岸边で朝を迎えるなど危険すぎる。

どうやら、また俺が彼を担ぐしかないみたいだ。

俺は周囲を見渡してどこか休めそうな場所はないか探してみる。

しかし、星明りだけでは視界はかなり制限され、納屋や林などといったものは見当たらなかった。

つまり、この疲れきった体でウィルを抱えてまま歩き回り、休める場所を探さないといけないらしい。

実にありがたくない状況だ。

それでも、しなくてはならない。

俺はいつの間にか眠ってしまったウィルを抱っこして、歩き出した。

第12話 敵兵

男は、隣にいる上司が心の底から羨ましかった。

何も容姿や家柄、財産のことを言っているわけではない。

彼の出身がどこで、どれだけの金を持っているかなど男は知らないし、顔なら自分の方がまだマシだと思っている。

男が羨んでいるのは、上司が持つ『MP40』と呼ばれる短機関銃だ。

従来の小銃では必ず使われていた木材が完全に排除された銃身、レシーバーからまっすぐに下へと伸びた長細い弾倉、そして金属製の銃床はなんと折り畳み式だ。

良くも悪くも実に一般的な小銃然とした形の銃を持つ男にとって、その姿はとても斬新に映った。

そしてなによりも魅力的なのは、全長が男の腕の長さほどもないそのコンパクトな銃は、ともすれば配給品の不味い煙草を取り出して火を点けるよりも早く、30発以上もの9mmパラベラム弾を吐き出せることだ。

それこそ、その短機関銃ならばホースから水を撒くように鉛弾をばら撒くことができる。

男の持つごく標準的な歩兵小銃『kar98k』でMP40の弾倉一本分と同じだけの弾数を撃とうとすれば、どれだけの時間が掛かるか分かったものではない。

給弾方法が一発撃つごとにボルトを引く必要があるボルトアクションであるだけでなく、装弾数がわずか5発なのだ。

32発の弾丸を撃つ出す頃には、下手をすると一分近く掛かっているかもしれない。

もちろん、この小銃にもMP40短機関銃に負けない良さがある。

例えば高い命中力であり、射程距離の長さであり、戦場での酷使に耐える信頼性の高さもそうだろう。

生産された物の中で特に命中精度の高い個体にスコープを取り付け、スナイパーライフルとして前線の狙撃兵へと渡されることからそれに分かる。

しかし、そんな利点も時と場合によつては全く意味を成さないということがあるのだ。

今が、そうであるように。

「いつまでそうしているつもりだ、ウェーバー二等兵。貴様は第一小隊だろう、さっさと突撃する準備をしろ」

男——アルベルト・ウェーバー二等兵は隣に座り込んでいる名も知らぬ伍長の言葉に心の中で盛大に舌打ちしながら「はっ」と応え、と、脱いでいた鉄帽を被りなおした。

耳から後頭部までを覆う形状のその鉄帽がウェーバーはあまり好きではなかったが、軍の装備なので被らないわけにはいかない。

それが自分の命を守るものであれば、尚更だ。

万が一にも戦闘中に頭から脱げることがないように顎紐をしつかりと結び、横に立てかけておいた小銃を取った。

そしてすぐにでもこの建物の影から飛び出せるように身構え、彼は突撃する準備を終えた。

ふと周りを見渡すと、自分と同じ突撃要員であるはずの他の兵士達はまだ煙草を吸っていたり、座ったまま会話を交わしていたりと、攻撃の準備すらしていないではないか。

それどころか、ウェーバーの直接の上司である第一小隊の小隊長ですらも隣の兵士に火を貸している有様だ。

にも関わらず、先ほどの伍長はウェーバーにだけ注意をしておいて上官である第一小隊長には勿論、他の兵達にも何も言わない。

ウェーバーは、今度は本当に——小さくだが——舌打ちをした。何なんだアイツは、意味が分からない。

これから命を賭けて戦うというのに、なぜその直前に嫌な気分にな

せられなければならないんだ。

いつそのこと、突撃する前に小銃で殴り倒してヤツの銃を奪ってやるうか。

飄々とした様子で地べたに座っている伍長を険悪な目つきで睨んでいたウェーバーは、首から掛けていたネックレスと認識票のチェインが絡まっていることに気付いた。

上着のチャックを少しだけ下げて絡まりを解いた彼は、ネックレスの先に通した銀色の指輪を手のひらで弄ぶ。

その指輪はたいした装飾も施されていない簡素なものだが、そこには多面体にカットされた小さな石——ダイヤが光っていた。

婚約指輪だった。

彼は軍役につく一ヶ月前に、一人の女性にプロポーズしていた。

相手は小さいころからずっと一緒にいた女の子。

自然に囲まれた田舎で育った彼にとって、元気の有り余る少年期に小さな村の中だけで遊ぶなどありえなかった。

村から出てすぐのところにある草原では毎日のように駆け回ったし、夏には草原の先にある大きな川に泳ぎにも行った。

体力が尽きるまで風を切って走り回り、草花の絨毯に寝転がって青空を見上げ、清流の中で何も身に付けないで泳ぎ、自作の竿と針で魚を釣った。

時には冒険と称して山奥の洞窟に入り、案の定迷子になって探しに来た大人たちに大目玉を食らったこともあった。

そんな時、いつも彼の後ろを小さな歩幅で一生懸命についてきていたのが彼女だった。

互いの両親が親友であつたため、初めて出会ったのはまだ目も開かないときのことだ。

二組の手足ではいはいができるようになった頃、まるで双子のように同じ場所で眠り、同じものを食べた。

なんとか立てるようになってからは、お互いを支えあうようにずつと手を繋いで歩いた。

言葉を理解できるようになると、二人して稚拙な会話を飽きることなく延々と続けた。

夜に一人で眠り、一人で入浴できるようになっても、いつも二人で床に、湯に入った。

初等科の学校に通うまで大きくなっても、片時も離れずに同じ刻を過ごした。

この頃の彼にとって、彼女という存在は親友であり、妹であった。決して万人の目を引くような端正な顔立ちではないが、背中に届きそうなくらい長い金髪を風になびかせ、大きな灰色の瞳をきらきらとさせて自分を追いかける、大事な家族だった。

それが高等科を卒業した辺りで、彼女のことが近くの町で噂になり始めた。

曰く、その小さな村には見たこともないほど可愛い娘がいるのだという。

偶然にもその噂が最も盛んに飛び交っていた時に町に買い物に来ていたウェーバーは、その娘が住むとされる村の名前と身体的特徴から、その噂が誰を言ってるのかすぐに分かった。

生まれてこの方、もしかすると両親よりも長い時間を共に過ごしているかもしれない相手なのだから。

変な話ではあるが、ウェーバーはその頃から彼女のことを意識するようになった。

第三者の、それも多くの人々からなる意見を知ること、彼女が類稀なる可憐な容姿をしていることにやっと気付いたのだ。

それから彼女を一人の女性として意識するようになるまでは早かった。

何しろ、元々発育の良かった彼女はすでに少女から大人への成長を遂げており、にも関わらずまるで幼子のように無邪気で、彼に完全

に心を許していた。

そのため、身体的な接触も多かったのだ。

日に日に彼女への気持ち募らせていた彼は、ふとした拍子にその想いを爆発させてしまった。

若さゆえの過ち、と言っべきか。

それは酷い雨が降っていた夜のことだった。

夜更けというにはまだ早い時間、彼は家から少し離れた所にある納屋の整理を父親から頼まれた。

ウェーバーは二つ返事でそれを引き受け、早速納屋に向かった。

そして当然のごとく彼女も一緒についてきた。

ウェーバーはともやりにくかった。

何しろ、好いた相手と狭い部屋の中で二人っきりなのだ、それも夜に。

かつては互いの体を洗い合ったこともある相手だが、その頃は今とは何もかもが違った。

だからこそ早く頼まれごとを終わらせようと急いでいたウェーバーだったが、運の悪いことに家から持ってきていた石油ランプの灯が消えてしまった。

石油が切れてしまった以上、家に戻って補給する必要があるが、今いる場所は明かりが一切ない雑多な納屋の中だ。

雨が降っているので月明かりがあるわけもなく、ウェーバーは普段使用しない場所なので間取りもよく分からない。

そんな中、それまでずっとウェーバーを見ているだけだった彼女が楽しそうに言った。

まるで小さい頃に二人でここに忍び込んだときに似ている、懐かしい。と、そしてこうも言った。

「ねえ、アル。久しぶりにここで一緒に寝ない？」

暗闇に慣れてきた彼の目には本当に楽しそうに笑う、眩しすぎる彼女の笑顔が写った。

そして、ここに来る間に雨に濡れて肌に張り付いた薄手のシャツと、豊かな丸みを帯びた体のラインが。

もちろん、全力で拒否した。

本音ではすぐにでも首を縦に振りたかったが、こんな風に場の勢いに任せた末の、なし崩し的な関係になるのは嫌だった。

だからこそ、自分がきつと我慢できないことが分かっていたからこそ、いろいろな理由を付けて断ろうとした。

こんなところで寝たら風邪を引く、納屋は汚くて不衛生だ、帰らないと親が心配する、ここはでかい蜘蛛が出る。

とりあえず思いつく限りを口に出してみたが、彼女はやけに頑固だった。

仕方がなく、納屋で一緒に寝ることを了承したが、ウェーバーは自分の意志を強く保つのにとても苦労した。

彼女の強硬な主張により、なぜか体が触れ合いそうになる至近距離で二人は横になっていたからだ。

雨が降りしきる夜、生まれたときから一緒にいた二人はいろいろなことを話した。

話の内容はほとんどが小さい頃のことだった。

中にはウェーバーが忘れていたようなことも彼女は実に鮮明に覚えており、そのことを楽しそうに語っては一人でくすくすと笑い、ウェーバーは過去の自分の恥ずかしい言動を聞かされ、まさに穴があったら入りたい気分だった。

ただ、ウェーバーにとってこの時間はとても楽しくて居心地の良いものだった。

久しぶりに彼女のことを一人の女性ではなく、妹のように感じられて、心が温かくなるような懐かしい時間だった。

ただ、彼がそう感じた直後に、彼女が昔の話を終えて今（現在）の話を始めてしまった。

そのことに、一抹の寂しさがウェーバーの胸によぎった。

ああ、昔は相手が何を考えているのか目を見るだけでも分かり合えたのに、もうそれもできないんだな。と、今更ながらそのことに気付いたから。

だが、感じた寂しさは本当にすぐ、ウェーバーの胸から去った。

頬を染めてはにかんだ彼女は、今日の夕方のことを語った。

「あのね、今日ね、アドルフに呼ばれたの。話しがあるって。なんだろうって思ってた行ってみたらね、その、ね。……告白、されちゃった」

衝撃が走った。

確かに走った。

それはまるで、大木を切り倒すのに使う大斧でぶった切られたような、大きな衝撃とともに鋭い痛みをもたらした。

男のウェーバーでさえかつこいいと思ってしまうような男が彼女に告白したことに？

彼女がヤツと名前と呼ぶような関係であつたことに？

それも少なからずあるだろう。

だが本当は、彼女がとても嬉しそうな顔をしていることに、だ。

彼には見たことがなかった。

彼女がこんな風に幸せそうにはにかんだ笑顔を。

ウェーバーはどうしようもない絶望感、喪失感に襲われて、目の前が真っ暗になった。

目を覚ますと、朝だった。

雑な組まれ方をした納屋の板の隙間から朝日が差し込んでいた。どうやら昨夜降っていた雨は止んだらしい。

そして、頭が回ってきたことで、彼は昨夜のことを思い出した。彼女のあの笑顔が脳裏に浮かんで、また落ち込んだ。

こんな最低な気分になったのは生まれて初めてかも知れなかった。
いや、きつと初めてだ。

それだけ彼女のことを好きだったということだろう。

もつと、もつと早く自分の気持ちに気付いていれば、あるいは違った未来があつたかもしれない。

だが、所詮は「かもしれない」なのだ。

俺は、それこそ数え切れないほどの「チャンス」に気付くことすらできず、今まであつたそれを逃し続け、今こんな気持ちなつて落ち込んでいる。

俺は……なんて馬鹿だ。

そこまで考えて、ウェーバーは自分が何も衣服を着ていないことに気付いた。

毛布は未だ下半身に掛かつたままだが、どうやらそちらの方も何も纏っていないらしい。

いったい服は何処にいったのかと周囲を見渡したウェーバーは、信じられないものを見た。

自分のすぐ横で、彼女が毛布に包まつたまま寝ているのだ。

それだけなら不思議はない。

懐かしいから一緒にこの納屋で寝ようと言ってきたのは彼女の方なのだ。

だが、毛布の端から覗く彼女の背中、何も身に付けていなかった。朝日を受けて輝いているのでないかと思ってしまうほどに白い、彼女の素肌。

彼女は、その上半身に下着を含めた一切の衣服を纏っていないかった。混乱するウェーバーの立てた物音で起きた彼女は、乱れた金色の髪を頬に張り付かせたままウェーバーの顔を寝ぼけ眼でしばらく見つめ、唐突に顔全体をトマトのように真っ赤に染めると毛布を顔まで引き上げて隠れてしまった。

その反応で事の顛末を悟ってしまったウェーバーは愕然とした。

俺は、彼女を襲ったのだ。

いくら身に覚えがなくて記憶もないからといって、この状況で間違えようもない。

しばらく彼が自分のしでかしたことに茫然自失状態に陥っていると、毛布で顔を隠したままの彼女がぼつりと言った。

嬉しかった、と。

この不可解な言葉で彼の脳はついにその処理能力の限界を超え、思考が恐慌状態へと悪化してしまった。

だが、ウェーバーが奇声でも発して余計な恥を晒す前に、彼女が恥ずかしそうに続きを話してくれた。

ウェーバーが彼女を今までどんな風に思っていたか、他の男から告白されたと聞いてどう思ったか、そして今はどう思っているか。

それを熱く、そう、熱く語ってくれたのだそうだ。

記憶力が素晴らしく良い彼女はウェーバーの言葉を一言一句間違えることなく暗記しており、それを全て言って聞かせた。

おかげで今度はウェーバーがトマトになる番だった。

どうやら彼は、無意識のうちに彼女に対しての想いを本当に包み隠さず、全て吐露してしまったらしい。

昨夜聞いた自分の幼少時代の失敗話など、恥ずかしいうちに入らないのだとよく理解できた。

今後は笑いながら自分から進んで他人に話せるだろう。

自分の想いをこれでもかと語りきったウェーバーは、彼女の返事すら聞かずに唇を奪ったのだそうだ。

そして、彼女も十数年の歳月を掛けて育んできた彼への想いを打ち明け、ウェーバーと体を重ねた。

つまるところ、二人はずっと昔から同じことを考えていたのである。少年期のウェーバーが彼女を妹のように感じていたように、彼女もウェーバーを兄のように慕っていた。

ウェーバーが町で彼女の噂を聞いたように、彼女も年を重ねることにかっこよくなっていくウェーバーに——自分の容姿を正しく理解

している彼は、これは明らかに誇張だと思った——ガールフレンドがいるという噂を女友達から聞いた。

そして互いに互いを男と女として意識するようになった。

ほぼ同じ時期にほぼ同じ考えを持ち、同じように互いを想っていたということだ。

唯一違うのが、彼女はウェーバーの考えを知るために嘘までついて仕掛けたことだ。

女は度胸、という言葉でウェーバーは彼女の話聞いて思い出した。

それから時間は、ウェーバーにとってまさに夢のようだった。

相思相愛の若い男女は、止まることを知らなかった。

もともと四六時中一緒にいるのが当たり前だった二人なのだ、周囲の目がない二人きりの時間などいくらでもあった。

夜も遅い時刻の彼の部屋で、初めての場所のあの納屋で、そして時には町の薄暗い路地裏で、二人は互いを激しく求め合った。

そして体を交わらせるたびに、ウェーバーの中で彼女に対する愛情はより深まっていった。

いつの間にか美しく成長した彼女をこの腕で抱けるのが嬉しかった。行為中の彼女の蕩けた表情を知っているのは自分だけだということが嬉しかった。

そして、終わった後に恥ずかしそうに頬を染める彼女が愛おしくてたまらなかった。

ウェーバーが貯金のお半を使つて指輪を買おうと決心するまでに、そう時間はかからなかった。

そして、夏も終わりに近づいたある日の夕方。

彼は彼女を村の近くの丘の上に呼び出した。

その日は、とても夕日が綺麗だった。

ウェーバーは約束どおりに来てくれた彼女に対して、三日三晩悩み続けて考えた台詞と共にダイヤの指輪を差し出した。

情けない話だが、彼女からの返事を待つ間、彼は少し怖かった。

もし断れたら、と思うと落ち着かなかった。

だが、彼女は泣いてくれた。

ぼろぼろと大粒の涙を流して。

それが嬉し涙だと、付き合いの長い彼にはすぐに分かった。

彼は質素ながらも確かに光り輝く指輪を彼女の左手の薬指につけてあげた。

それから二人はどちらからともなく抱き合い、口付けを交わした。それはとても長く、いつまでも続いた。

太陽が地平線の向こうへと消えてからも、二人は互いを放さなかった。

二人はすぐにでも式を挙げたいと考えていたが、それはできなかった。

ウェーバーの下に一通の手紙が届いたのだ。

その国章が刻まれた手紙は、ウェーバーに夢のような時間が終わったことを知らせた。

国からの、徴兵令だった。

彼の国は近年、前世界大戦から戦火を交えている隣国との戦争に備え急速に戦力を増強しようとしていたのだ。

そうして彼はプロポーズをしてから一カ月後、式すら挙げられずに花嫁を故郷に残して軍の訓練基地へと出頭しなくてはならなかった。

それももはや一年以上も前の話だ。

手のひらでその時の指輪を弄っていた彼は、泥で汚れた頬を皮肉げに歪ませた。

歩兵の超短期育成プランに基づいてこの一年間訓練を受けていたウェーバーは、あれ以降に彼女に会った回数を数えてみた。

すぐに分かった、三回だ。

足して一週間にも満たない時間しか、彼女と時を共にしていない。一年前までは、一週間も会わないことなど一度もなかったというの

に。

彼はこの前線に出てくる前日、彼女からの小包を受け取っていた。小包の中には一冊の本ができそうなほどの枚数の手紙と、十数枚の写真が入っていた。

モノクロの写真には、彼女と、産まれたばかりの赤ちゃんが写っていた。

ウェーバーと彼女との間に出来た第一子だ。

手紙には産まれたのが予定日より遅くて難産だったこと、それでも産まれてすぐに大きな声で泣き出してとても元気のいい子であったこと、毎日乳をいっぱい飲んですくすくと育っていること、この調子だともうすぐ家に帰ることができそうであること、そしてウェーバーが無事に帰って来られるように毎日お祈りをしていることが彼女の綺麗な字で綴られていた。

また、産まれた子は女の子だそうで、ウェーバーに名前を付けてほしいとも書いてあった。

残念ながらその時は出撃までに時間がなかったため手紙を書くことはできなかったが、彼はまだ会ったこともない我が子に送る名前をすでに考えていた。

彼女のように素敵な女性になれるようにと祈りを込めて、その子の名前は――

「第一小隊、行くぞッ！」

「第二小隊！ 援護射撃、始め！」

小銃の薬莢室の中で火薬が爆発する音にウェーバーは現実へと引き戻された。

見ると、すでに第一小隊の兵士達が物陰から飛び出して敵への突撃を開始しているではないか。

ウェーバーは指輪のついたチェーンを懐にしまうと、小銃を引つ

かんで建物の陰から大通りへと飛び出した。

背後であの気に食わない伍長が「さつさと行かんか！」と怒鳴る声が聞こえたが、そんなものは無視した。

彼は興味がなかったので知ろうともしなかったが、その伍長はウェーバーが住んでいた村のすぐ近くの出身だった。

そして、もうすぐ三十歳を超えようかという独り身の伍長も町で評判の美人にはもちろん興味があつた。

それゆえにウェーバーに対して訓練時からいろいろと地味な嫌がらせをしてきたのだが、彼は知る由もなかったし、知る必要もなかった。

ウェーバーは身を小さくかがめながら通りの両側に並ぶ建物に沿うように走り、山積みになった瓦礫を飛び越えながら仲間の背中を追う。

大通りの中央辺りでは第二小隊が援護のために放った銃弾が次々と彼を追い抜き、敵の陣地へと吸い込まれてゆく。

彼ら第一小隊が目指しているのはこの通りの先にある広場、及びこの町の領主の館だった。

領主の館にはこの町に配備されていた敵守備隊の残党が立て籠もっており、そこさえ落としてしまえばこの町は完全にこちらの軍が占領したことになる。

友軍は全方位から敵を攻め立てており、敵の残党はわずかな兵力しかないようなので陥落するのは時間の問題だった。

しかし、敵はそこから脅威の粘りをみせた。

敵がああ館に籠城してからそろそろ10日が経過しようとしていた。

こちらも一日の間に何度も波状攻撃を仕掛けているのだが、敵からの銃声は鳴り止むことも弱まることもなく、反撃の激しさは10日前と変わっていない。

もしかしたら、敵は包囲された状態からでも弾薬や兵の補給を受ける手段を持っているのだろうか。

例えば、館の下には地下道が通っていたりして……。

そこまで考えたこともあったが、ウェーバーはすぐに考えるのを止めた。

考えをめぐらすのは下っ端の俺ではなく将校の役目だ、と。

そんなことよりも彼はどうやって生き残るかに頭を働かせるよう努めた。

そして今はそれを考える余裕もない。

敵からの機銃掃射が始まったのだ。

ほぼ町の中央に位置する四階建ての領主の館は、広場から延びる幅の広い階段を登った先に入り口がある。

よって、その玄関は大通りや広場よりも少し高いところにあるのだ。敵はそこに重機関銃を設置して、大通りから広場までの全てを照準に収めていた。

その重機関銃が火を吹き、ウェーバーとは通りを挟んで反対側の建物に沿って走っていた仲間達をあっという間に飲み込んでしまった。

「畜生っ！ よくもやりやがったな、あのくそ野郎！」

前を走っていた兵の一人が悪態をつきながら建物の瓦礫の陰に伏せ、銃を構えた。

ウェーバーも彼を真似て伏せてみたが、遮蔽物としてその瓦礫は二人も隠れることができなかった。

見ると他の仲間たちも前進を止め、敵の銃弾に身を晒さないように各々隠れ始めている。

今いる場所から5mほど離れたところに半壊したレンガの壁を見つけたウェーバーは、男が射撃するのと同時に走り出した。

頭を低くして一気に駆けつけたウェーバーは途中で小さな金属音を聞いた気がしたが、無事に遮蔽物の陰へと身を隠すことが出来た。

荒い呼吸を繰り返しながら頭を少しだけ出して敵の動向を探る。

敵の重機関銃はちょうど弾を撃ち尽していたのか、給弾作業中だった。

た。

その周りには小銃を撃つ敵兵の姿が複数あるが、ウェーバーはかまわず壁の陰から体を出すと半身に銃を構えて狙いを付けた。

照門から覗いて、照星と機関銃射手の姿をまっすぐに捉える。

そして引き金を引いた。

肩に伝わる小さな反動と共に銃口が上へと上がりそうになるのを押さえ、急いで次弾を装填する。

弾が敵に当たったかどうかは定かではない。

だが、とにかく一発でも多く撃ち込んで敵の動きを封じなくては。

ウェーバーの周りでも第一小隊の仲間たちが、後方では第二小隊の連中が援護射撃を行っている。

いくら連射性が低いボルトアクションライフルを持つ兵が多いと言っても、40も50も銃口があればその火力はたいしたものだ。

敵の重機関銃が設置されている辺りは、着弾する無数の弾丸によって碎け散った壁の破片や粉に覆われつつある。

これでは敵も遮蔽物から頭を出すことすらできないだろう。

「第一小隊、前進だ！」

小隊長の少尉がそう命令を出した。

ウェーバーも隠れていた壁から離れて一気に敵陣地目掛けて走った。ただ、そのほんの一瞬の間に彼は見た。

瓦礫の陰に隠れていた際に自分の横にいて、悪態をつきながら銃を撃っていた男。

彼が伏せ撃ちの姿勢のまま、鉄帽に開いた小さな穴から血を流して絶命している姿を。

あの時聞いた小さな金属音は、彼の鉄帽を敵弾が貫通した音だったのかもしれない。

運の悪い奴だ。

ウェーバーはたったそれだけの感想でもって彼の死を自分の中で完

結させ、必死に走った。

広場までは50mほどの距離があり、そこまでたどり着く間にまた何人かの仲間たちが斃れた。

「散開しろ！ 建物の中から狙え！」

小隊長は部下たちに向かってそう叫ぶと、目の前の通信兵が背負った無線で後方の部隊と連絡をとり始めた。

広場に入ってしまったらもう隠れられるような場所はない。

広場前まで前進した第一小隊の援護の下、今まで援護に回っていた第二小隊と予備の第三小隊を前進させようというのだ。

そして至近距離から二個小隊の援護射撃を行い、一個小隊を突撃させるつもりには違いない。

さつそくウェーバーは近くの民家の扉を蹴破って中に進入した。

ついてきた二人の仲間とともに全ての部屋を警戒して回ってみたが、敵兵の姿も住民の姿もなかった。

その間に、表では弾幕が薄くなった隙について敵の重機関銃が射撃を再開していた。

ウェーバーはガラスが割れた窓へ駆け寄り、銃身を窓枠に乘せて応射する。

円形の広場に面した建物の中からは味方の発砲炎が無数に瞬いているのが見えた。

一緒にこの家に入ってきた仲間達もこことは違う部屋で引き金を引いていることだろう。

ウェーバーは自分の周りに敵弾が集中し始めたので、頭を下げたり過ぎすことにした。

その間に弾薬を装填するため、ポーチから5発一纏めにしたクリップを取り出す。

ボルトを引いて開放した機関部にそのクリップを挟み、縦に並べられた弾を指で押し込む。

そして外に残ったクリップを捨ててボルトを元の位置へと戻し、装填完了だ。

ウェーバーは顔を少しだけ上げて外の様子を窺った。

ここより少し高い位置にある敵の機銃陣地では、館にあったものと思われる大型の家具を盾にして一個小隊程度の兵たちが銃を撃っている。

問題の重機関銃はウェーバーたち第一小隊が散らばった建物にはなく、大通りの方へと銃口を向けて鉛弾を吐き出し続けている。

バラけた小数の敵は小銃手に任せて、まとめて狙いやすい複数の敵に狙いを定めているらしい。

あれをどうにかしなくては前に進むどころの話ではない。

他の第一小隊の仲間たちはどうしているのか確認しようと身じろぎしたウェーバーは、不意に腰の辺りで感じた違和感でその存在を思い出した。

木製の柄に、金属製の小さな缶の形をした弾頭。

柄付手榴弾が二個、ベルトに挟みこんであった。

ウェーバーは前日の戦闘で戦死したやつからそれを失敬していたのを、すっかり忘れていたのだ。

もう一度頭を上げて機銃陣地までの距離を測る。

だいたい30mといったところだろう。

十分に届く。

ウェーバーは手榴弾の柄底部にあるキャップを外して一本をすぐ横の床に置き、もう一本は手に持って膝立ちで立った。

そして柄の中から伸びる紐を掴んでまさに発火させようとしたとき、背後から慌ただしいブーツの音が聞こえてきた。

「おい、アル！このままじゃジリ貧だぜ！」

鉄帽の顎紐をぶらさせながらウェーバーの元へ来たのは、伸びたい放題になっているヒゲがトレードマークのシュミット二等兵だ。

今年で29歳と隊の中でも比較的高齢にも関わらず未だ二等兵である理由は、彼が大酒のみで、酔うと必ず近くにいるやつに喧嘩を吹っかけるからだ。

ウェーバーも一度彼と飲みに行つて以来、二度と一緒にには行っていない。

素面であれば優秀な兵士であり、口は悪いが面倒見の良い性格から上司にも部下にも同僚にも好かれてるのに、その悪癖のせいで彼はもう三度は下士官と二等兵の間を行ったり来たりしている。本人はまったく気にしていないようだ。

「シュミットさん、立っていると危ないですよ！」

「はっ、こんなへなちょこ弾なんて当たるかよ——うおっ！」

言つた側からシュミットのすぐ横にあった食器棚に敵弾が当たり、派手な音を立ててガラスや食器が砕け散つた。

そのことで、この部屋がキッチンであつたことにウェーバーは初めて気付いた。

「あぶねえな、くそつたれめ。当たつたらどうしてくれんだ」

ウェーバーの側まで這つてきたシュミットは飄々と「死んだら酒が飲めねえじゃねえか」とのたまいながら、脱げた鉄帽を被り直した。ウェーバーには彼のその余裕が頼もしく感じられて仕方なかった。戦場という非日常の中で日常の自分を失っていないのは小隊の中でも彼だけだからだ。

たぶん俺も知らず知らずのうちに変わっているんだろうな、とウェーバーは心の中だけで呟いた。

しかし、頼りにしているなんて態度を彼に見せると間違いなく付け上がるので、ウェーバーは違うことを口に出した。

「シュミットさん、第二と第三の小隊はどうなったんでしょうか？」

「さあな。大方、敵さんの掃射で足止めでも喰らってるんじゃないのか？ それより、さっきうちの小隊長がやられたぜ」

「小隊長が！？」

「ああ、頭にどかんと一発だ」

理想的な逝き方だったぜ、とシュミットは忌々しげに唸った。

ウェーバーはつい数分前に見た小隊長の姿を思い出す。

規律にうるさく少し融通が利かないところもあったが、気の良い人だったのに……。

「おいアル、感傷に浸ってる場合じゃねえぞ。こっちは指揮官がやられたんだ、突撃するにせよ退却するにせよ、命令するやつがいねえ。俺たちは状況が分からねえし、第一、他の連中との連絡手段がねえ。無線持ったやつが小隊長と一緒に死んじまったからな。第一小隊の生き残りが別個に動いても逃走すらできんぞ」

この嵐だしな、と窓から飛び込んできた弾丸の音にシュミットとウェーバーは二人して首を縮める。

「どうしましょうか？」

「決まってるだろ、何とかしてアレを潰すんだよ」

シュミットが言っている『アレ』とは、もちろん敵の重機関銃のことだ。

あれが作り出す弾幕さえ無くなれば後はどうとでもなる。
しかし、それには如何せん火力が足りない。

「なんで俺たちの部隊には迫撃砲とかパンツァーファウストとかが
配備されてないんですかね？」

「国も第一線のエリート部隊に渡す分を作るだけで精一杯なんだろうさ。俺たちみたいな『予備』の部隊は武器の支給も順番待ちってわけだ」

戦争は始まったばかりだというのに、前線にいる部隊ですでに装備が不足しているというこの状況。
つまり、国のトップたちは十分な準備もしないまま戦争に突入したということだ。

なんて愚かなんだろうか。

その愚かしさで死ぬのは決定を下した本人たちではなく、俺たちのような末端の兵士たちだってのに。

だが、上が馬鹿だろうとなんだだろうと、俺は絶対に生き残らなければならぬのだ。

愚痴を言っている場合ではない。

「その通りだ、アル。そこで、お前さん良いモンもってんじゃねえか」

シュミットがヒゲに覆われた口元を吊り上げてウェーバーの手元を顎でしゃくった。

その顔だけを見るとカモを見つけてニヤける荒くれ者にしか見えないのだが、良いものを持っているのは確かだ。

そう、手榴弾だ。

「おい、ワイル！　ちょっとこっち来い」

シュミットが家の奥へと叫ぶと、すぐにワイル二等兵が現れた。ワイルはウェーバーとそう齢も変わらない若者だが、ウェーバーはあまり彼と話したことがなかった。

今ここにいる三人で、この民家の中にいる味方は全てだ。

「いいか、今から俺が敵さんの陣地まで突っ走る。お前はアルと一緒に援護してくれ」

ワイルはウェーバーの方をちらりと見ると、無言で頷いた。しかし、ウェーバーはこのヒゲ面男の作戦に黙って了解できなかった。

「ちょ、シュミットさん。そんな危険を冒さなくても手榴弾はここから投げればいいじゃないですか、十分に届きますよ」

「バカやろ、もし外したら本当にヤバイだろうが。ここは肉薄して確実に仕留めるのが一番だ」

「でも外に出たらあつという間に蜂の巣です」

そう言っている間にも、銃弾が唸りを上げて頭上の窓から部屋の中へと飛び込んできた。

今ここから出るなんて自殺行為以外の何者でもない。

「だからこそお前らが援護するんだろうが。おら、悠長に話してる時間もないぜ」

どこからか、味方の悲鳴が聞こえてきた。

その助けを求める悲痛な声を聞いてしまえば、ここでまごついていることがひどく罪なようにウェーバーは感じた。自分は絶対に死ねない。

だが、己の身かわいさに保身に走るなどありえない。

「分かりました。ですが、行くのは俺です」

「ああ？ 強がんなよ、ひよこは巣の中で小さくなってな」

「冗談は体だけにしてください、シュミットさん。走るのは俺の方が遥かに速いですよ」

突撃する準備をしていたやや肥満体型のシュミットはその言葉に動きを止め、ばつが悪そうに頭をがしりと掻いた。

その隙にウェーバーは小銃を置いて、弾薬を入れたポーチを外し、銃剣から水筒までおよそ必要のないものは全て地面に置いた。

そして拳銃と二個の柄付手榴弾だけを持つ。

その間、シュミットは複雑そうに、ワイルは特に感情の浮かんではない顔でウェーバーを見ていた。

「それじゃ、まともな援護を期待してます」

ウェーバーが準備を終えるのと同じくして、ちょうど敵の重機関銃も弾が切れたらしい。

行くとしたら今をおいてない。

シュミットが何かを言うてくる前に、迷いが生じる前に、ウェーバーは広場へと飛び出した。

敵も味方もいない銃弾だけが行き交う広場を脇目も振らずに走る。たかだか30mの距離など全力で走れば6秒とかからないはずだ。だが、ウェーバーにはそれがひどく長く感じた。

自分の荒い呼吸だけがやけに大きく聞こえ、後方から援護してくれているであろうシュミットとワイルが撃つ銃の音も、前方で発砲炎を上げている敵の銃声も聞こえてこない。
走る距離は陸上競技の短距離走よりもだいぶ短いはずなのに、ウェーバーの心臓は爆発しそうなほど激しく脈打ち、彼を息苦しくさせた。

——突然、膝から力が抜けた。

急なことになすすべもなくウェーバーは転んだ。
敵の銃口の先で動きを止めるなど、これでは狙ってくれと言っているようなものだ。

ウェーバーはすぐに立ち上がる。

が、激痛が体を駆け抜けて再び硬い地面へと倒れこんだ。
もう一度試してみたが、少しでも体を動かすと耐え難い痛みが腹部に走って上手く立つことができない。

仕方なくうつ伏せに倒れたまま腹へと手を添えてみる。
すると、ぬるりとした嫌な感触がした。

「はっ、はっ、はっ——うぶっ」

喉の奥からこみ上げてくる衝動に耐え切れずに口を開くと、吐瀉物は鮮やかな赤色をしていた。
撃たれた。

その事実が頭の中で渦を巻く。

だが、激痛がかえってウェーバーを冷静にさせた。
傷を負った場所を手で強く押さえながら、うつ伏せに倒れた状態で目だけを動かして前方を見る。

すると、信じられないことにまだ広場の半分も来ていないことが分かった。

だが、これなら仲間たちの下へ戻ることができるかもしれない。

ウェーバーは、必死に四つん這いの姿勢になるまで体を動かした。痛み能耐え切れずに途中で何度も倒れこんだが、その度に歯を食いしばり、額に脂汗を浮かべながら、血溜まりの中に手について体を支えた。

ふと、ウェーバーは首に掛けていたチェーンがその血溜りに浸かっているのを霞がかかってきた目で見つけた。

チェーンの先に通っていた指輪も、自分の血に染まっていた。

ああ、と声を出す力も残っていなかったウェーバーは心の中で嘆息する。

彼女とおそろいで買った、結婚指輪。

これの片割れは今、彼女の左手の薬指に嵌っている。

彼女のことからとても大事に、それこそ宝物のように大事に扱ってくれていることだろう。

それは今でも新品と変わらない輝きを放っているはずだ。

だが、俺の方はどうだ。

血に塗れて、まるで錆びているみたいじゃないか。

本当に、俺は遠いところに来てしまったんだな。

指輪を見下ろすように四つん這いのまま固まっていたウェーバーは、静かに目を閉じた。

その脳裏に今までの人生が思い起こされる。

生まれ育った家、田舎の小さな村、どこまでも続く草原、綺麗で澄んだ川、遠くに見えた山々。

楽しかったとき、辛かったとき、嬉しかったとき、悲しかったとき、幸せだったとき、怖かったとき、笑っていたとき、泣いていたとき。いろいろな場所が、出来事が、思いが、頭の中を過ぎってゆく。

そしてどんな場所でも、どんなことをしていても、どんな気持ちのときでも、すぐ側には必ず彼女がいた。

小さい頃から片時も離れず、いつの間にかかけがえのない女性へと変わっていた愛しい彼女。

彼女をこの腕に抱くことは、もう二度とないだろう。

彼女の澄んだ声を聞くことは、もう二度とないだろう。

彼女の優しい笑顔を見ることは、もう二度とないだろう。

もう二度と、彼女には会えないだろう。

そして、彼女との間に産まれた我が子にも、会えないままだろう。

父親らしいことが何もできなかったところか、一度も会ってあげられなかったパパだけだ。

キミが無事に生まれたと知った時は、本当に嬉しかった。

できることなら、キミを抱き上げて、子守唄を歌って、頬におやすみのキスをしたかった。

休日には三人で村の外の丘に出かけて、広い草原で目いっぱい遊んで、彼女が作ってくれたお弁当と一緒に食べたかった。

そうしてキミが成長していく姿を、彼女と二人でずっと見守っていたかった。

でも、それはできないようだから、せめて名前だけはパパから送りたいと思う。

キミの名前は――『カリス』。

カリス・ウェーバーだ。

ママのように美しく育ってほしいという思いから、美の女神の名前から取ってみたんだ。

ちよつとありきたりかもしれないけど、キミは気に入ってくれるだろうか？

せっかく考えた名前も、キミに伝えることすらできなかったのは残念だけれど……。

俺の人生は、幸せなものだった。

胸を張って言える。

でも、それは彼女がいてくれたからだ。

俺がどれだけ彼女に感謝しているか、どれだけ救われたか、そしてどれだけ愛しているか、彼女は本当に正しくは理解できてないだろう。

彼女に対する愛情は、そのあまりの深さに俺自身でさえ底が見えないのだから。

ただ、これだけは言える。

アルベルト・ウェーバーは、彼女と一緒に歩むことができて、本当に幸せだった。

もう、まともに昔を思い返すだけの気力もなくなってきた。

こんなに血を流したんだ、助かるとは思えない。

どうか、先に逝く薄情な俺を許してほしい。

本当に、本当に、君を愛していたよ。

さようなら――

「――レニー」

次の瞬間、ハンマーで殴られたような衝撃が後頭部に走り、ウェーバーの意識は暗い闇の中へと落ちていった。

第13話 市街戦

ここに来てから何時間経ったのだろうか？

ふと、気になった。

しかし腕時計は万が一のことを考えて今はポケットの中であり、見ることができない。

太陽の位置から判断しようにもその太陽が見えない。

影の傾き加減で計ろうかとも思ったが、そもそも俺はこの地域に来るのが初めてなので分かるはずもない。

それでも強引に予測するとしたら、午後二時くらいだろう。

つまり俺は約九時間ほど、ひたすら動かずに小さな筒を覗き続けていたというわけだ。

これほど長い時間体を全く動かさないのはさすがに初めてだが、別に辛くはない。

……とは、さすがに言えない。

体中の筋肉が凝り固まって、ずっと前から鈍く痛んでいる。もし首を傾けようものなら、骨が折れたのではないかと思うような音が鳴ることだろう。

そうして体中の間接を鳴らして最後に思いきり伸びをしたら、さぞ気持ちが良いに違いない。

だが、それは絶対にできない。

少なくとも夜になるまで、又は敵が攻撃を仕掛けてくるまではここでこうしていなくてはならないのだ。

今はただひたすらにこの苦痛を耐えるしかない。

——と、ふいに右手の方で連続した射撃音が響いた。

意識を目の前の筒へと向けると、敵兵が一斉に建物の陰から飛び出

してくるところだった。

完全に、集中力が途切れていた。

一度だけ大きく深呼吸をして気を引き締める。

そして、目の前の光景に全ての意識を集中させた。

敵は援護射撃を受けながら縦隊で突撃してくる。

俺はその隊列の最後尾にいる敵兵に照準を合わせた。

細い十字の線を兵士の体にぴったりと重ねるのではなく、目標の進行方向・速度を見極め、目標のやや前方を狙う。

そして、静かに引き金を引き絞った。

狙撃銃特有の尾を引くような銃声が味方のライフルの乾いた発砲音にかき消され、スコープの向こう側で兵士が一人が崩れ落ちる。

ボルトを引き、次弾を装填。

熱を持った空薬莖が瓦礫の上を跳ねる音を聞きながら、再度引き金を引く。

肩に強い反動を残して撃ち出された銃弾が、敵の左胸を穿った。

スコープを覗きながら三度ボルトを引き、敵を殺すために指をほんの少し動かす。

爆発音を残して空気を引き裂きながら敵兵へと飛翔する弾丸は、しかし狙いが逸れたのか人体を引き裂くことなく石畳の道路を小さく砕くだけに終わった。

すぐ近くで響いた着弾音に首を竦めた敵兵を見つめながらボルトを引いていると、その兵士の右手が何の前触れもなく吹きとんだ。

俺が驚きに目を見開いている間に、敵兵は銃弾を受けて全身から鮮血を噴出させる。

その敵兵が倒れたとき、体はボロ雑巾のように成り果てていた。

あの連射性と威力から考えて、恐らくM2重機関銃の掃射を受けたのだろう。

銃本体だけで40kg近い重量を持つその機関銃は、12.7mm弾を一分間に400から600発撃ち出すことが可能だ。

連射速度においてはドイツ軍の凡庸機関銃『MG42』の分速12

00発と比べるべくもないが、7・92?弾を使用するMG42に対してM2重機関銃の威力は絶大だ。

なにせ米軍の主だった戦闘機に搭載されている機銃がこのM2なのだ。

装甲板を纏う航空機に対しても有効な武器を生身の人間に向けるとどうなるか。

その答えが今、目の前で示された。

四肢が吹き飛び、腹から生々しい色の内臓が飛び出した無数の死体が地面に転がっている。

顔をやられた者は認識票がなければ誰の死体かすら分からないだろう。

しかし、日常であれば目を覆いたくなるような惨状も、非日常の戦場では大した感慨も湧かない。

それが敵兵の身に起きたことであれば尚のことだ。

俺は先ほどの集団を重機関銃に任せ、突撃してくるもう一隊を遊撃することにした。

銃口をゆっくりと左へ向ける。

すると、瓦礫の陰で伏射する一人の兵士の姿がスコープに映った。

俺の位置からでもその敵兵は鉄帽を被った頭部と銃しか見えないが、それだけで十分だ。

敵の頭と十字線を重ね、一呼吸おいて引き金を引き絞った。

その瞬間、俺と目標の敵兵との間を別の兵士が横切る。

一瞬目標を見失ったが、再び捉えたその敵兵の鉄帽には確かに小さい穴が開いていた。

俺はすぐに先ほどの兵士を探したが、すでに遮蔽物に隠れたのか見つかからない。

ちょうど建物の陰から半身を出して発砲した別の敵兵を照準し引き金を引いたが、着弾するよりも早く身を隠してしまったので弾丸は当たらなかった。

装弾していた全ての弾を撃ち尽くした俺はボルトを最後部まで引き、

そこで止める。

手元に置いているポーチから先が鋭く尖った『スピッツアーブレット』型弾頭の7・62mm弾を五発取り出し、一発ずつ押し込むように装填していく。

五発目を装填すると同時にボルトを元の位置に戻し、視線を敵軍へと戻した。

突撃してきた敵の一隊は大通りの中ほどで前進を止め、こちらの陣地に向けて射撃している。その背後からも敵の放った弾丸が盛んに飛んできており、次々と陣地周辺に着弾している。

今、陣地にいる者が不用意に頭を出せば間違いなく風穴が一つと言わずに開くだろう。

それほど敵からの銃撃が激しい。

友軍の機銃陣地は制圧されつつあるようだ。

と、その様子をやや上から観察していた俺は、大通りから外れた路地で動くものを見つけた。

そちらの方をスコープで見してみると、一人一人が何とか通れるほどの幅の道を三人の敵兵が走っていた。

先頭を行く者は短機関銃を構え、しきりに前方を警戒しながらそれでも迅速に前進している。

その後方に続くのは金属製の箱を両手に抱えてた兵と――肩に何かを担いだ兵士。

路地はやや薄暗いため、何を持っているのかはつきりと見えない。

俺は三人目の兵士にスコープを合わせてじつと注視する。

それが担いでいる物は細く、やけに長い、そして背中後ろで小さく揺れているのは……銃架？

それを理解した瞬間、俺の人差し指は引き金を引いていた。

しかし最後尾を走っていた兵士は前の者に倣って路地の角を曲がってしまったため、銃弾は空を切った。

俺はM73スコープから目を離して先ほどの兵士達が走っていた路地を確認し、それらが行き着く先を予測する。

いや、予測するまでもなく、この広場に向かっていることは明白だった。

銃撃を避けるために路地を通って迂回していた敵兵、その最後尾を走っていた奴が持っていたものはおそらく凡庸機関銃『MG42』か『MG34』だろう。

はつきりとは見えなかったが、どちらであるかは問題ではない。

大きな火力を持つ機関銃が突然、陣地のすぐ近くに現れれば友軍の苦戦は必至。

最悪、総崩れだ。

それを防ぐためには俺が狙撃するのが一番早く、そして正確だ。

俺は丸暗記したこの地区周辺の地図を脳裏に展開し、敵が移動していた通路を確認する。

路地裏を行く敵が最短経路で広場に向かうと仮定して、敵の一団が

俺の視界に入ってくるのは……………あと二回。

それを逃せば敵は広場に着いてしまう。

いや、チャンスは二回も必要ない。

敵がどこに現れるかは既に分かっているのだ。

あとはタイミングと、そして誰を狙うかだ。

俺が狙いをつけているとも知らずに、敵の一団が路地の角から飛び出してきた。

並び方は先ほどと変わらない。

警戒しながら先頭を行くのが恐らく目標を指示する指揮官、真ん中にある弾帯の入った箱を持っているのが給弾手、そして最後尾で機関銃を背負っているのが射撃手だろう。

俺が狙うのはもちろん、射撃手だ。

路地の角から銃を構えた一人目が飛び出し、その陰に隠れるように二人目が続き、そして——引き金を引いた。

機関銃を持った奴が俺の視界に入ると同時にもんどりうって倒れる。

その拍子に担いでいた機関銃を取り落とし、金属の塊が地面に叩きつけられるのが見えた。

遠く離れた俺には聞こえてこないが、ずいぶんと派手な音がしたのだろう。

指揮官と給弾手がはつとしたように足を止めて背後を振り返った。

そうすると必然的に、俺の銃口の先には立ち止った二人の敵が出来る。

十字線をその無防備な背中に合わせて、引き金を引いた。

銃弾は短機関銃を持った指揮官らしき兵士の腰に当たり、その敵兵は崩れ落ちるように膝から倒れ伏した。

一番悲惨なのは残された給弾手だろう。

前後にいた味方が急に撃たれたのに、敵がどこから撃ってきたのかまるで分からない。

隠れようにも路地には遮蔽物になりえるものが何もない。

狼狽したように倒れた味方を交互に見ていたその兵士は、助かるには路地を進むしかない判断したようだ。

だが最初の一步を踏み出すより早く、俺の放った弾丸が敵兵の胸を貫いた。

俺はこのM73スコープが2・2倍の低倍率であることに秘かに感謝した。

前のめりに倒れていく兵士の、絶望に染まった表情をしっかりと見ないで済んだのだから。

路地裏で敵の機関銃を始末した俺は、再び大通りの方へと視線を向ける。

先ほど前進していた敵は、まだ大通りの途中で遮蔽物に身を隠しながらの射撃を繰り返していた。

俺に気づき、銃口を向けてくる敵兵はいない。

ゆっくりと狙いをつけた俺は、一人の敵兵が遮蔽物から顔を上げた瞬間にその頭を撃ち抜いた。

次弾を装填するためのボルト操作は素早く、照準は丁寧につける。銃身に残った最後の一発で敵を射殺した俺は、再び給弾してさらに二発の銃弾で二人の敵を葬る。

そうして役目を終えた空の葉莢を排出していると、光学照準器越しに突撃を再開した敵兵の姿を捉えた。

すぐさま先頭を走っていた兵の頭に狙いをつけてこれを砕き、次いで別の兵の膝を撃ち抜く。

広場に辿り着くだけで戦力の五割以上を失った敵の小隊は散開して家屋内へと消えてゆく。

その背中を追っていた俺は物陰に隠れた二人の敵兵を見つけた。とある店舗の、通りに突き出した二階部分を支えるレンガ風の太い柱。

その背後で通信機を背負った兵と、その通信機から延びる受話器に怒鳴っている兵が機関銃の射撃をやり過ごしている。

——通信兵と、階級章から将校と思われる敵兵士。

狙撃兵にとっては最優先の攻撃目標だ。

俺は一つ深呼吸を挟んでから将校と思わしき兵士にスコープの十字線を合わせた。

レンズの向こうでは、しきりに背後を振り返りながら辺り一面に響く銃声に負けないように大声を上げている敵の姿。

早く仕留めようと動きそうになる人差し指を抑え、大きく息を吐きながら軽い興奮状態にあった心を意識的に鎮める。

数秒の時間をかけて自分を落ち着かせると、上下左右に微妙に揺れ動いていた敵の姿が十字線の上に乗ることが多くなってゆく。

そして将校と思わしき敵兵の眉間に照準が合った瞬間、引き金を引き絞った。

強烈な反動と共に撃ち出された弾丸は数十メートルの距離を目にも止まらぬ速さで駆け抜け、狙いと寸分違わぬ場所に着弾、鉄製のヘルメットごと頭部を撃ち砕いた。

まるで見えない何かに後頭部を引っ張られたかのように仰け反りな

がら後ろに吹っ飛ぶ敵兵。

その手から通信機の受話器が落ちる。

機関銃弾の嵐をやり過ぎすことにほとんどの関心を向けていた通信兵は、背後の上官が斃れたことに気付いていないようだ。

確かにその位置なら機銃陣地からの銃撃は避けることが可能だろう。だが、俺が居る場所からならばその全身がよく見える。

俺は完全に無防備な通信兵の頭にも同じく7・62mm弾を喰らわせた。

それからしばらくの間は敵からの銃撃が疎らだった。

広場から延びる大通りの向こうにいる敵は、こちらの重機関銃が絶えず牽制しているため近づくことはおろか援護射撃もまともにできていない状態であり、突撃してきた小隊も広場前まで前進したはいが、損害が大きく既に戦闘集団としてはまともに機能できないだろう。

今も時折、住宅の窓から発砲しているがあまりにも散發的だ。

一発撃てばこちらの小銃手が数人で狙い撃ちにするので下手に攻撃することもできないのだろう。

住宅の中に散開していった敵の数は、俺が確認しているだけ12人。その内3人は俺が狙撃し、1人は機銃陣地にいる小銃手が撃ち殺すところを目撃した。

つまり、突撃してきた敵の小隊はもう10人も残っていないはずだ。後方から援護していた敵もこれ以上無理に攻めてくる様子もないし、今回の戦闘はもうすぐ終わるだろう。

戦闘が終わった後は、こちらの目と鼻の先に取り残された敵小隊の生き残りを掃討することになるはず。

だが狙撃手である俺がそれに加わることもないだろうし、またしばらくは周囲を警戒しながら待機することになるのだろう。

スコープを覗きながらそんなことを考えていると、断続的に聞こえていた重低音が不意に途切れた。

おそらくM2重機関銃が弾切れを起こしたのだろう。

素早く給弾作業を行えば10秒とかからずに再び火を吐くようになるはず――

「……ん」

俺が数時間ぶりに発した声は、唇の間から漏れ出したかのようなそんな一文字の音だった。

少し予想していなかった光景を見たせいか、自分でも眉間に皺が寄ったのが分かる。

スコープの向こう側で一人の敵兵が民家の中から飛び出してきたのだ。

小銃は持っていない。

その代わりに柄付き手榴弾と拳銃を両手に握っている。

飛び出してきた兵士は館の入口に設けられた機銃陣地の方へと全力で駆ける。

重機関銃が撃てない今を好機と見て突撃したのだろうか。

それは、あまりにも無謀だ。

俺はすぐさまその兵士の胴体に照準を合わせて引き金を引いた。

その直後に敵兵士の細い体から血飛沫が上がり、足を縛れさせて倒れた。

弾丸が腰付近に着弾したおかげで即死はしなかったようで、その兵士は何度も体を起こそうとしては倒れこむを繰り返す。

だが、その分野に詳しくない人間でも一目で分かる。

あの出血量ではもう助からない。

俺の放った弾丸が内臓を撃ち抜いたのか、それとも大動脈でも傷つけたのか――それは分からないが、倒れ伏した敵兵を中心に石畳の上に血だまりが広がっていく。

そう長くはないだろう。

それは機銃陣地にいる人間も理解しているのか、その兵に銃口を向

ける者はいない。

慈悲をかけるために無駄弾を使っていられるほどこの状況は生易しくないからだ。

もちろん、俺も止めをさすことはしない。

俺の場合は無駄弾云々以上に、自分の居場所が敵軍に露見するのを避けたいからだ。

それに、あの兵士にはまだ利用価値があるかもしれない。

そんな俺の考えを証明するかのように、今なお死ねずに地面に倒れている敵兵が出てきた住宅から今度は小太りの兵士が飛び出してきた。

しかしその兵士は玄関から1mと離れない内に頭部に一発の銃弾を喰らい、まるで庇う様子もなく顔面から地面に倒れた。

即死だ。

俺はゆっくりと空薬莖を排出しながらそう判断した。

命のやり取りをする極限の状態で結ばれた戦友という名の絆は、とても強いものに違いない。

俺自身はまだ戦場に出て日が浅いのでよく分からないが、想像はできる。

それは目の前で苦しんでいる戦友を無感情に放っておくことができるほど軽くはないはずだ。

だから、自身が危険に晒される状況でも何とか助けようとする。

こちらが構えている銃口の前に自分から出てきてくれる。

広場の真ん中で倒れた兵士の利用価値とは、まさしく『これ』のことだ。

——つまり、餌。

戦闘可能な敵兵を無力化するための餌だ。

足枷と言ってもいい。

たとえ救助にきた兵をこちらが殺さなくても、その兵は負傷した者を救護所等がある後方まで運ばなくてはならない。

また、負傷兵が自力で歩けない場合は担架等を使うことになり、そうなれば一人の負傷で三人の敵兵が前線から退くことになる。

これほど効率的なことはない。

今回は救助に二人も出てこないだろうと思い一人目の敵兵が出てきた時点でそれを撃ち殺したが、本来はそういった戦術もある。

勿論、あまり他人に褒められ^{ひと}れた方法ではないが。

それから数分後、後方に控えていた敵からの銃撃が完全に止んだ。どうやら諦めたらしい。

こちらの重機関銃も撃つのを止め、未だ住宅内に潜んでいると思われる敵小隊の生き残りも鳴りを潜めた。

あれほど騒がしかった広場に、静寂が満ちる。

そうはいっても完全に静まり返ったわけではない。

友軍の機銃陣地では負傷者の手当てや現状確認の声などで騒がしい。しかし、銃声が織りなすオーケストラに比べればそんなものは小鳥の囀り同然だ。

そんな機銃陣地の様子を軽く眺めていた俺は、移動しようと動きかけてそれに気づいた。

広場の中心からやや外れた辺りに動く者がある。

いや、そこに人が居ることは知っていたが、とっくに死んでいるものと思っていたのだ。

それは俺の狙撃によって負傷した敵兵。

そいつは明らかに致死量を超える血を流しながらも、腕を立てて何とか立ち上がるうともがいている。

その姿を、俺は狙撃の体勢を崩さずに見つめた。

大人しく目を瞑っていれば出血多量で気絶することもできるだろう

に、奴はまだ生きること諦めていないらしい。

足掻いたところでどうせ助かりはしない。

両軍が睨みあう中心で倒れている奴を助けようと駆けつける者はいないし、もしいたならそいつもすぐに撃たれるだろう。

どのみち、今から衛生兵に見せようが軍医に見せようが、奴が死を免れるとはとても思えない。

足掻くだけ辛いだけだ。

——しかし撃った俺が言うのもなんだが、奴の生への執着は凄いものがある。

銃創の痛みに呻き、苦しみながらただ死を待つのではなく、立ち上がって生き残ろうとしているのだから。

ただ……、死んだ方が早く楽になれるのは間違いないだろう。

そんなことを思いながら、俺は頭から被っていた汚らしい布を取り払った。

そして荷物を手早く纏め、狙撃場所を変えるために移動を開始した。筋肉が凝り固まって軋む体に鞭打って歩いていると、どこからか一発の銃声が聞こえてきた。

——狙撃銃の銃声だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3983g/>

異界の狙撃兵

2011年1月18日15時00分発行